

東海大学丸二世（芝浦出港直前）



マーシャル方面遺族会  
 (旧クェゼリン方面戦没者遺族会)  
 郵便番号 154  
 世田谷区野沢3-11-3  
 電話 東京 (421) 3614  
 振替口座東京 93487 番  
 編集兼発行人 浮田信家

# 再びマーシャル諸島を叩く

(サイパンから) 浮田信家

環礁18号で政府派遣中部太平洋戦没者遺骨収集団同行希望者を募集しましたが、男子に限られていること、終始乗船のまま行動すること、そして二ヶ月以上の長期に亘ること等のため、誰もが熱望しながら、参加の申込みがありませんでした。幸い私は関係各部の多大のご理解とご協力をいただきましたので、会員の夫、親、兄弟の眠る地に再度渡航し、身を以て英霊の功に謝し、心からその霊を慰める機会を与えられたことをこの上なく喜んで参加した次第です。

かねて環礁誌上にお伝えしましたように、この団体は政府主催の中部太平洋戦没者遺骨収集団と称します。

本年九月十三日八木厚生省援護局長から村上本会会長宛「中部太平洋地域における戦没者遺骨の収集を実施することになりました。つきましては、次により貴団体のご協力を得たいので依頼します。なお、協力団体は、政府の派遣する遺骨収集団と行動をともし、一体となっておりまして、ご了解願います。」という文書がきました。

内容  
 「政府は、このたび中部太平洋地域における戦没者遺骨の収集を実施することになりました。つきましては、次により貴団体のご協力を得たいので依頼します。なお、協力団体は、政府の派遣する遺骨収集団と行動をともし、一体となっておりまして、ご了解願います。」

## 一、地域

中部太平洋のマーシャル諸島等

## 二、期間

昭和四八年一〇月一日(東京出発)から同年二月一四日(東京帰着)までの六五日間

## 三、日程

別紙日程による(省略)

## 四、人員

一名

これに対し九月十七日村上本会会長より八木厚生省援護局長に「ご依頼の件、お示しの諸条件とともに了承いたしました。参加人員一名には本会副会長浮田信家を充てたいと存じますのでよろしくお引廻しのほどお願い申し上げます」と回答いたしました。

人員は希望者があれば三乃至四名を本会に充当するご予定のようでしたが最終的には次の通りとなりました。

- |                                      |     |
|--------------------------------------|-----|
| 日本遺族会                                | 一名  |
| マーシャル方面遺族会                           | 一名  |
| ミレ島第四施設部会                            | 五名  |
| 六六警備隊                                | 三名  |
| 南洋第四支隊                               | 三名  |
| 九五二海軍航空隊                             | 一名  |
| 日本青年遺骨収集団                            | 一七名 |
| 計                                    | 三一名 |
| なお乗組員、東海大学教官、実習生等合計すると八十数名が乗り合せています。 |     |

## 目次

再びマーシャル諸島を叩く	浮田 信家(1)
遺骨収集団お見送り	浮田 信家(2)
南十字星を仰ぐ	浮田 信家(3)
東海大学丸二世佐藤船長の生い立ち	浮田 信家(4)
遺骨収集団を送る	井上 賀雄(5)
父からの便り	井上 賀雄(5)
ブラウン玉砕直前の四十日	高田源次郎(6)
(その一) 高田源次郎	高田源次郎(6)
マーシャル戦記(その四)	木ノ下 甫(8)
戦争(私の場合)	鮫島みさを(9)
クェゼリンの兄より	前原寿美子(9)
私の戦争体験記	小室舜司郎(10)
三十年祭を迎えるにあたりて	堀江かつ江(12)
会員のお便り	安沢 隆平 高林 セキ 井上 義夫 渋谷セキノ
昭和四十九年二月六日の御案内(4)	三十年祭の現地報告会・旅行会
南十字星	佐藤 宗不(14)
寄付者芳名	
事務局だより	
役員・篤志会員	

船長は佐藤孫七さんという方で、63才ですが、矍鑠として壯者を凌ぎ、お酒も煙草も用いず、典型的な男の中の男否、篤志家であることは別項「佐藤船長の生い立ち」によって御了解下さい。従って乗組員一同この船長のためならと和氣霽々勤務に励む様子は近頃例をみない麗わしい雰囲気です。さて船は予定よりもやや早く、多数のお見送の方々と午後二時四十分芝浦埠頭の纜を解き、六十五日間遺骨収集の途につきました。

平穏な東京湾には十万トンを超えるタンカーから、銚つりらしい釣船まで、入港する船、出港しようという船、碇泊中の船、観音崎を出るまで一隻一隻見るのが忙しいほどでした。

前回よりキエップ島出身のデブルム船長だけが日本語がわかり、他の船員は誰一人話せなかったので玉子の生だの半熟などの望みも理解してもらえず、食べものはすべて洋食でしたが、今回はま全部が日本人、出港の十一日の夕食はたち魚の煮付と湯豆腐、キエリの塩漬といったお菜ですから船に乗っている気もしないほどです。

船と同じ方向に、競争でもするつもりとかトビ魚の群れが左舷にも右舷にも見られました。

十二日午前三時、ふと甲板に出ましたら右三十度に八丈島の灯台や民家のあかりがあかあか見えしました。そして四時十五分同島を右正横にみて南下がつづきました。東京湾を出てから多少ローリングはありましたが、船酔しはなし

く士官食堂の朝食に出たのは乗組員の外は私一人(団員中士官食堂で食事をするのは私も加えて下さる五人です)だけ、あと四人の方は顔を出しませんでした。

11時半明神礁中ペヨネズ島、午後2時スミス島を何れも左舷に見て航過しました。海洋調査を目的とした船ですから、写真もとりますようにして下さい。

夕食はキャベツ、トマトを添えたピブテキだったのですが、海の若者たちはナイフもフォークもなく、かみしめたときの味がいいですと平気でたいらげていました。しお気のぬけた私には残念乍らかみきれず、小さく切ってもらいました。船内電話で誘われ八時まで船長室で快談。ブリッジから呼ばれて船長が出たので私の部屋に帰りましたら芦名氏、竹之下氏、小林氏、厚生省の若手三人が待っていました。見送りの方から送られた巨碑をごち走しましたが大変な喜びよう。おそくまで話がづきました。山ほどもって来た仕事ができるかどうか。

十三日昨日も今日も日出一時間位前からブリッジに上がり、日出のカラー写真を願ってシャッターをきりました。澄みきった空に、塵一つ含まない空気は実にうまいです。会員の皆様は心の底から申しわけないと思っています。午後二時に西之島火山二・八哩まで近寄りました。九月二十四日爆発した火山は、今なお二、三分おきに、大きな石塊と噴煙をあげて獅子のほえるような豪快なうなりを我々の胸に感じさせてくれます。東京から一〇〇〇キロ。新噴火以外の西

島にはツルナ、ブタブサ等の植物が繁り、多数棲息する駒鳥や阿呆鳥は本船を迎えるかの如く、船すれすれに悠々と翼を拡げて訪ねてくれます。東京都小笠原村に属するとか。

夕食のサラダは蟹、アスパラ、トマト、レタス、ユズ玉子、ニンジン、キューリそしてコーンスープ。皿の多いこと格別。乗船以来出されたものは全部平らげる外に味噌汁やスープは必ずお替り。お蔭様でいよいよ健康、鈴木一等航海士(副長)からナンバーワンの評をいただきました。喜んでいいのか恥ずべきか、何れにしても元氣一ぱいです。

十四日午前四時硫黄島の東をとおりました。船長と芦名さん、私など僅かの人数乍ら花束、握りしめて英霊の冥福を祈りました。午前七時に南硫黄島を右舷正横二哩、もし人がいたら見える程の距離を航過しました。そろそろ環礁の原稿を書きはじめます。

夕食後総員端艇部署訓練がありました。乗員全員が本船から退船しなければならぬ事態の訓練です。

十五日行き合ふ船もなく、飛行機影すらなく、南へ南へと進みます。

明日はサイパン入港がきまり、真水使用の用途もついたらしく今日に入浴が許可されました。船内アナウンスでこれに加えて今日我真水シャワーの使用を許しますとつけ加えました。普通は海水浴槽、海水石鹸で入浴したあと、洗面器一ぱいの真水のシャワーを使

ってよいというのです。

七時から水産学科の研究資料採集のため速力をおとし、直径一米位の鉄環につけた網を流して曳きました。漙しなくひろい太平洋の真中で10ミリにもみたくない稚魚を採集して、人知れず研究にあたる船長以下教官、遠洋漁業実習生のご努力には頭が下りました。

十六日午前四時半アナタハン島を左に見ました。日出前のためシルエット的の眺望でした。あと五、六時間でサイパン島です。上陸許可あり次第サブランさんや

が浮ぶような思いがしました。

浮田さんはお元気でこの前の横浜での時より若く和やかに見受けられた。美しい奥様お子達と可愛いお孫さん。会の方々も皆さん明るく横浜でのお見送りのような悲壮感はないような気がした。日本国代表であり大ぜいの人達と日本の船ですし、もうマインシャル事なら何でも知っているのだから誇らしいような気持になった。

佐竹さんがお船の中をご覧になりませんか案内しますよと云われついて行きました。入口の近くが浮田さんの船室で二人部屋です。いぶん小さな室でしたが便利に出来ているそうです。冷房もあるので前の貨物船とは違い、さすがご苦労が偲ばれます。食堂も見ましたが係の方は「日本食ですし食事の心配はありませんよ、安心し

### 遺骨収集団お見送り

十一月十一日午後一時すぎ、気ぜわしくキョロ／＼見わたした乍ら田町駅前につくと顔見しりの本部役員にお会いしてホット胸をなでおろす。親切に案内して頂いたタクシーで棧橋についた。東海大学丸のマスドはすぐ見え遺族会の人達もそこそこにお見えになる。お前は忘れて思い出せないがみんな顔みしりです。それに背いマインシャル方面遺族会の旗がすぐ目につきとても嬉しかった。小さい方の旗をかりて振って見る。何だか自分も偉くなったような気がした。

佐藤常任幹事さんがこの旗はマインシャルの青い海から空に南十字星が昇って行くデザインですとの事、遺族会のシンボル旗南十字星。わたくしたちの遺族会は全国遺族会のスター(南十字星)であると遺骨収集の見送りに来たのに微笑

セーマンさんのところに訪問のつもりでしたが、私も政府職員として行動してくれとのこと、高等弁務官その他挨拶、パーティー、自由時間はへりますが、遺族会のため、なるべく出すべきところには顔を出して、連絡を密にしておきたいと考えています。

船といい団といい日一日人の和強く、私自身元氣一ぱいです。再度の弔問に、私なりに全力を注いで努力してまいりますことをお誓いいたします。

が浮ぶような思いがしました。

浮田さんはお元気でこの前の横浜での時より若く和やかに見受けられた。美しい奥様お子達と可愛いお孫さん。会の方々も皆さん明るく横浜でのお見送りのような悲壮感はないような気がした。日本国代表であり大ぜいの人達と日本の船ですし、もうマインシャル事なら何でも知っているのだから誇らしいような気持になった。

佐竹さんがお船の中をご覧になりませんか案内しますよと云われついて行きました。入口の近くが浮田さんの船室で二人部屋です。いぶん小さな室でしたが便利に出来ているそうです。冷房もあるので前の貨物船とは違い、さすがご苦労が偲ばれます。食堂も見ましたが係の方は「日本食ですし食事の心配はありませんよ、安心し

てまかしてください」「ご苦労様よろしく願います」とあいさつして船を一廻り見させて頂きました。クエゼリン島に上陸が許されて浮田さんが初めてあの慰霊碑の前に遺族会代表として参拝する事が出来るようになることでしたと伺いました。遺族会からの御土産としてクエゼリン島のアメリカ軍司令官夫妻に黒真珠のネクタイピン、カフスボタン、ブローチを用意したとのことでした。

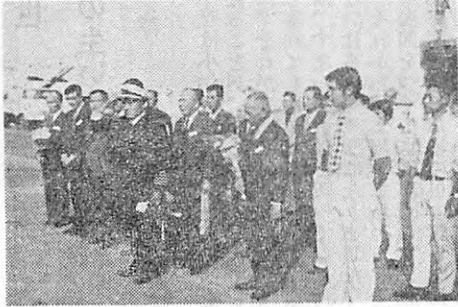
二時に遺骨収集団の結団式と壮行式が始り船を背に整列なさいました厚生省役人・我々の代表浮田さん・日本遺族会、戦友会、青年遺骨収集団、東海大学丸の方々に。青年達を見てみると走馬燈のように浮び胸がしめつけられるようです。今でもあの時の顔がその儘に浮んで来ます。三〇年にもなるのに学生姿の皆さんの年頃であるはずが……

私も一しよにこの船で行くような気持ちになり涙がこぼれてならなかった。厚生省の団長さんと一緒に浮田さんの挨拶までは何とか緊張していましたが次々の挨拶は申し訳れないが、うわの空で自分勝手な空想をしていたようです。続いてマーシャル方面遺族会岡野幹事夫人がきれいな着物姿で心からの遺族の気持ちをそのままお伝え下さいましたので、いらっしやる方々も更に決意を新たにしておつる勇士を一柱でも多く本国におつる覚悟が見られるような気持ちでした。炎熱の赤道直下の作業本常に御苦労様ですが是非お願いいたしますと自然に頭がさがりまし

た。花東贈呈は我が遺族会からだけでした。阿部団長さん、浮田さん、船長さんへ同時に黄色のパラの花束を可愛いお子さんから差し上げ緊張に張りつめられた場がいくらかほぐれたようです。

船長さんは、「十二月十四日皆さんの御期待に副えるよう大勢の英霊と団員を元気にこの棧橋におつれするよう全員で頑張ってください」と心強い言葉をのこして上船なさいました。花東贈呈を何時もテレビ等で見るのは赤や色とりどりのにぎやかなものと思っていまして黄色一色の花束です。遺族の気持ちをよく表現しているように思いました。

三時出航と聞きましたが、少し前にタラックがはずされ出航の合図がありました。小さい子どもの「イッテイラッシュヤイ」の甲高い声が耳にのこります。浮田さんはマーシャル方面



佐藤船長のあいさつ

遺族会旗青地に南十字星旗を船上から、陸からは佐藤常任幹事さんや私たちも旗を何時までも打ち振り遺骨収集の成功と皆さんのご健康を祈り乍ら船が見えなくなる迄見送りました。

十二月十四日にこの場所にお迎

### 南十字星を仰ぐ

(トラックから)

浮田 信家

(希望により匿名)

えでできるよう自分の身体を大切にしなければいけない、老の身をかねばい乍ら三〇年祭まで、いやクエゼリン島へ行くようになるまで死にきれない。と、そんな気持ちになりました。

10月20日(土) 只今乗船東海大学丸二世は東経百五十度、北緯十度附近をトラック島に向け航海をつづけています。役員又会員ご一同のお蔭又肉親英霊のご加護によって、平穏そのものの海を南下しています。私は航海中はいつも午前四時半頃から、ブリッジ(船橋)に上って行きます。船長さんはじめ航海士の方々は日出前の星の観測は船位をきめる上が一番大事なときです。今朝そのためブリッジに上ったのですが今回の航海ではじめて南十字星を見ました。何と表現したらよいのかきれいに澄んだ空には、東京で見える星の何倍かの数多の星がキラキラとしています。そして南十字星。私一人こんな麗わしい星をたのしんでよいのか。本当に申しわけなく思っています。

昨日午後4時頃でした。東海大学の佐藤教授のところへ大学院の一学生が「只今の水深八千米余を測定しました」と届けて来ました。水深にはあまりに数が大きいのでたずねましたところ、マ

旗色を少し暗くした感じですが。本会の会旗にとっても似た感じがします。私の居室の机の隅に本会旗を立てかけ、その前にミクロネアの旗をたて飾りました。船にきたミクロネアの人、島民はすべてそうですが、見てもらいます。この親密感に誰もが喜ぶと思います。タイミングよく旗の完成したこと、そしてこれを船に一本下さったことはとてもよかったです。

リアナ海域で一番深い有名なところですとのお話でした。一体どの辺のことなのか、ブリッジに上って、海図を見せていただきましたところ、この附近に八、七五〇米と書かれたところもありました。八千米、富士山の高さの二倍余、約二里。この船から海底まで二里。太平洋戦争中この附近で沈没した彼等の軍艦、商船そして飛行機はいずれ海底まで沈んでいったのでしょうか、何分かついて、否何時間かかかって底についたのか、麗わしい海を見つめ乍ら、それら護国の英霊に何分も何分も黙禱を捧げご冥福を祈りました。

サイパンの高等弁務官のところから、ミクロネシアの旗をいただきました。7cmに20cmの小旗です。六ツの支庁をあらわすため六ツの星をいれてあり、色は本会の

船長室のドアに只今営業中という札の下っていることがありますが。船内電話で「緊急会議を開きたいのですぐ来て下さい」と船長からかかってくる時はいつもこの札が目につきます。東海大学の実習生五人を集め、そこに私を呼んで談笑の中に年寄りに接し、人生経験を聞くというお氣もちらしく、細かいところに気を配られる一ツツの行為に教えられるものが多いと思えます。実習生たちは片っ端からよごれた茶わんやスプーンを洗います。冗談ばかり云っておられるようですが、考えてみると、一ツツが躡けるようです。ある実習生は後にまわって、船長さんの肩をもんでいました。

サイパン観光中何回か見た内地からの若い人達の態度に眉をひそめた私も東海大学の船長さんと実習生の間に見たその麗わしい一瞬には心から嬉しく思いました。そして年輩の者が若い人達の批判をするとき、自らはどうなのか、佐藤船長のような思いやり、心の配り方に欠けたところはないか、反省する必要はないか、自分を責めました。

# 東海大学丸二世

## 佐藤孫七船長の生い立ち

浮田信家

東海大学丸二世は、芝浦埠頭の岩壁で私共遺骨収集団を待っていた。

外国行の船とあって、団員も見送人もしばらく船内に入れなかったが、税関事務の終了と共に乗船を許され、船長室前をとったので、御挨拶をした。ところが昔からの友人を遇するが如く船長室に招じこまれ、来室中の船長夫人に、私の家内をひきあわせて下さり、自宅で丹精こめて作られた赤飯のご馳走にあずかった。手短かに小学校を出てすぐ船乗りになつてから丁度五十年船長生活三十五年という経歴を聞かされた。でっぶり太った、潮やけしたその顔色は生れながらの船乗り、十日程前厚生省で聞いたとおりの、はじめての対面乍ら頼れるお人柄とわかった。以来船内途中で出会っては招かれ、電話で呼ばれてはお茶だ蜜柑だとか馳走になつてはいる中、気象庁の根本順吉観測官が佐藤孫七船長から聞いて書いた生い立ちの記を拝見した。この船長の船で中部太平洋で戦死した肉親の骨を拾う、こんな恵まれたことも英霊のお蔭と幸せこれにすぎないものはない。船長のご承諾を得て、その前半を本号に掲載した次第である。

私は小学校以来ずっと、地図を見るのが、なんとなく好きでした。それが運命というか、明けても暮れても地図、それも海の地図、すなわち海図と切ってもきれない仕事の船乗りになりました。それから、まわりまわって、その海図をつくる水路部に入り、直接海図を作るための根本資料を採る測量船に乗って、この仕事のために働くことになったのは、何かに見えぬ宿命があったように思われます。

私の生れた(明治四十三年十二月)山形県鶴岡市大字由良は、酒田から八里ほど南のところにあって、もとは由良浦といひ、この名前は、関西から東北にきた移民が郷里をしのぶよすがとしてつけたものと思ひます。現在、舞鶴港の名におされて、あまり知られていませんが、舞鶴の西方にある由良は、せん前の起りなのでしよう。代々漁業を営む家の四男として生れましたが、父の仕事は沿岸から大よそ二一三マイルの範囲で近海漁業や磯漁をすることでした。春から秋にかけてはタイ、ヒラメ、ホウボウがとれ、また冬になるとタラや一貫目外のツノザメが獲物でした。兄達も皆、漁業に關係した仕事をしております。長兄の万吉(孫太郎)は由良で家

業を継ぎ、次兄の喜一郎は共盛丸(三〇トン)の船長として千葉県の銚子と賀茂を本拠に漁業をいとなんでいます。また三男の本間孫四郎は、現在賀茂におりますが、銚子に本拠のある本間水産を經營し、北洋や近海の底びきをやっております。

日本海に面する私たちの漁村は、秋の始めから、冬にかけて急に海が荒れはじめるのが常です。そうしたときに兄達が小舟のついで出漁した後、あらしになつて、その帰りが遅いと、母は私をおぶったまま背降観音の掛軸に灯明をあけて熱心に祈願していました。その一幅の掛け軸は女身の観音菩薩が、暴風のため難破した舟人を救つてゐる絵であり、荒狂う波の上に、こつ然として蓮華の花が浮かび、その蓮華のうてなには観音様がやさしい御顔を難儀した人を救つた喜びの微笑をうかべながら直立しておられるものでした。御自身の両手にも、頭上にも難破船の人々を一杯のせてゐる図柄を幼時の記憶として、まざまざとおぼえております。

由良の小学校は分教場でしたので、五年までしかなく、六年の時は三瀬の豊浦小学校に入りました。大正六年頃のことです。小学校の頃は先生からの影響というよりなことは、とくにありませんが、同級の友人たちとはみな兄弟のつきあい、これは現在までつづいております。時々村の鎮守の森に集つて様々の昔話をすることもあります。

小学校を出てから、すぐ家業を継ぐことになりましたが、小舟のついで操業してゐるとき、沖を大きな船が通ると、海の仕事でも、もっと大きな仕事をしてみたいとよく考えたものでした。十一月の中頃から海がしけはじめると、船が出られないので、そのような時は夜学の補習学校に通いました。授業は二時間ずつでしたが、そこで国語、ソロバン、代教を習ひました。

郷里にいた間の教育で私に大きな影響を与えたのは、昭和に入つてからの青年訓練所の教育で、この指導官の平藤道須先生(由良の曹洞宗海蔵寺住職)からは、精神的な面から色々教えをうけました。先生と釈迦について問答したこともあり、語学をやらねばならぬことも先生からいわれました。自分は宗教的の話が好きなので、自分なりに「修養全集」などいふん読みました。そしてその頃の気持ちとして、自分でできることなら、困つてゐる可哀そうな子供達をあずかつて、面倒をみることを生涯の仕事としてみたいと思つておりました。

故郷をはなれ、山形県水産試験場の最上丸(七八トン)に乗りくんだのは昭和六年のことです。たまたま、その年に人員の募集がありました。試験に合格したのですから入ったわけですが、この船は冬の間は鳥島附近までマグロの試験操漁にゆき、その他の時期は日本海で仕事をしておりましたが、私はこの船に丸三年のついでに、二一、二才の頃です。この時の船長は、農林省から来られた田村徳氏で、この人から船には資格試験が免除とかがあつて、勉強次第で

えらくなれるが、学校を出ていなかったら、死ぬほど勉強しても乙種船長止りだというようなことを聴かされました。

この頃のことだと思ひ出すのは、ウラジオ附近で試験操漁をしてたときに、ロシアの船に追いつかれたことです。ウラジオ沖のスコールド島の附近でマスの底曳き網をやつてゐた時でしたが、とつさに網についていた操網を切り、その一端にガラス玉の浮きをつけて、網を船から切りはなし、各船共全速で逃げました。このときは運がよいことに霧が出たので助かりました。新潟の試験場の船で発砲されたのがあつたので、本当に気が気ではありませんでした。あとで網をとりにいったのですが、他の船は中々見つかりません。しかし自分は網をきりはなすときにちゃんと「山を合せて」おいたので、すぐに見つけることができました。「山を合せる」というのは沿岸の山二つを見通しておいて、それによつて船の位置をきめることですが、私は若いときからこれをやつていたので、そのとき大へん役に立つたのです。

山形の水産試験場から水産講習所に入ったのは昭和九年九月のことでした。はじめは白鷹丸(一三二七トン)に乗り組み、遠洋航海などにも参加しましたが、十三年からは二等航海士として実習船神鷹丸(二三五トン)に勤務しました。この頃が、私の一生のうちで一番勉強した時代のように思ひます。駿河台の商業学校の夜間部に通つたのもこの頃でした。

講習所の助手の仕事は教材づく

りの手強いやら何やらで大へんい  
 そがしく、昼間は全く時間がな  
 いものですから、四時半でやめさ  
 せてもらって、パンをポケットに  
 ねじこみ学校にかけつけました。二  
 八歳ぐらいでしたが、子供たちと  
 机をならべて勉強しました。九時  
 五十分頃月島の宿に帰り、それ  
 からお二時すぎでして、寝るのは  
 つも十二時すぎでした。

昭和十四年一月から二月にかけ  
 て、農林省水産局の監視船白鳳丸  
 (三四〇トン)の臨時航海士とし  
 て北千島に補給にまいりました  
 が、この時、あとで水路部に入る  
 ときに大へんお世話になった佐藤  
 市衛氏(その後東京管区気象台総  
 務課長)と知り合いになりました。

(佐藤市衛氏の談話によれば、  
 この時の要務の一つは、北千島の  
 観測の気象観測所で、吹雪のため  
 に死んだ測量夫の遺骨をとりに行  
 くことであった。佐藤孫七氏は自  
 分の当直が終って個室に帰っても  
 休まずにおそくまで勉強をしてい  
 ました。市衛氏は、この青年のまじ  
 さにうたれ、冬のしける船の中  
 で、将来について色々語りあつ  
 たという。そして水路部に帰って  
 から、監視船白鳳丸にこの青年の  
 あることを報告しておかれたとい  
 う。)

白鳳のこの時の出航は一月十日  
 でしたが、夜学の始業式は九日  
 であつたのです。私は辞令をもつて  
 学校にゆき、事情を話しました。  
 学校では特別にとりはからなくて  
 くれ、もし帰ってから進級試験に通  
 れば合格させてやるということ  
 でした。幸い試験には合格し、四年

に進級したのですが、二月から千  
 葉県の水産試験場にうつることに  
 なり、学校は途中で止めねばなり  
 ませんでした。千葉にうつってか  
 ら、ここではじめて安房水産学校  
 の練習船房丸(一七六トン)の船  
 長になりました。

船長になった最初の航海はニ  
 ーギニアの北の漁場からパラオ島  
 方面で、遠洋漁業科の学生二名を  
 ふくむ三二名と一緒にした。

房丸の船長になった翌年、大洋  
 漁業から南水洋の捕鯨船の船長に  
 ならないか、という話がありまし  
 たが、学校の方で困るというの  
 で、一時沙汰止みになりました。  
 しかし再度の交渉があり、昭和十  
 六年十二月には大洋漁業(④)の  
 漁業部に入りました。この頃は  
 大きな船はほとんど徴用船として使  
 われてゆき、私の乗る船がなくな  
 ってしまったので、船舶部にうつ  
 ることになり、ここで第一播州丸  
 (一〇〇〇トン)に二等航海士と  
 して乗り組むことになりました。

船は青島、天津、大連、朝鮮の清  
 津の方をまわり、その後はパンコ  
 ックに行つて、その牛を冷凍  
 し、これを方々に補給する仕事を  
 していました。この頃はタイ人や  
 中国人も使いましたが、つれて行  
 った半島人との間によく喧嘩があ  
 りました。これは半島人が日本人  
 としての大へんなプライドをもつ  
 ていたからです。土地の子供たち  
 も、私によくなつき、バナナの葉  
 にバナナとかマングースとか、  
 シヤシヤップをつんで沢山もつ  
 てきてくれたりしました。

十七年七月に私が内地に帰つて  
 くと、水路部の方ではどんなこ

とがあつても私をとりたとい  
 うのです。その頃は大洋漁業の方  
 もほとんど月給を上げてくれまし  
 たが結局、水路部に入ることに  
 なり、ただちに第四海洋の船長に  
 なりました。ここでの最初の仕事は  
 七月から十月までの間、九州の油  
 津を基地としての海洋観測でし  
 ました。しかし十月末に船は東京に  
 帰され、その年の十一月には海軍  
 気象部の気象観測船としてラポー  
 ルに向いました。

(当時ラポールにあった海軍  
 第八気象隊(隊長大田早苗大佐)  
 の観測班長大道寺重雄氏(現気象  
 庁考察官)は当時の状況を次のよ  
 うに語つた。

「ラポールの基地では作戦上、  
 北緯一五度から南半球にわたる天  
 気図がえがかれていましたが、当  
 時一時困つたことは観測点がない  
 ことでした。それで佐藤さん達の  
 船が現在の定点観測船に相当する  
 仕事を行うためにやってきたので  
 す。機帆船を含む六、八隻の船が  
 この方面の海域に気象観測のため  
 配置されました。この中で観測  
 船として最も成績が良かったのは  
 第四海洋と水産庁の白鳳丸でし  
 た。佐藤さんは非常に運のよい人  
 で、何回も飛行機の銃撃をうけ、  
 あるときは鉄砲を弾丸が貫通する  
 ようなことがあつたのですが、無  
 事でした。第四海洋は八五〇もの  
 弾丸もありました。十九年一月に  
 第四海洋が帰る頃は日本は全く制空  
 権を失つていたので、気象隊はあ  
 つても無きが如きもので、それで  
 気象関係の技生はラポールに集結  
 して、佐藤さんの船で内地に帰る

ことになりました。このときも、  
 第四海洋に乗つて内地まで帰つた  
 人は助かったが、トラック島で他  
 の船に乗りかえた人は第八機動隊  
 にやられて皆亡くなりました。佐  
 藤さんは、どこで勉強しておられ  
 るのかしらぬが、船乗りには珍ら  
 しい篤学の士です。とにかく、あ  
 れだけ海洋と気象について調べて  
 いる人の船にのつていれば絶対安  
 全です(ね)」

十八年十一月二日のラポールの  
 大空襲で第四海洋も動かなくなつ  
 てしまったので、応急修理をした  
 上で内地にひき上げたのは十九年  
 一月のことでした。

この間、私はずっと軍人になら  
 ず、文官として頑ぱりました。  
 軍人にならなかつたのは、軍人に  
 なるに船長がやれなくなつてしま  
 うということ、それからまた指揮  
 権を乱用する軍人がしばしばあり  
 このような軍人に対してはしたが  
 わぬという気があつたからです。  
 十九年一月に内地に帰つてから  
 は、日本近海の哨戒や気象観測の  
 仕事を終戦までつづけました。  
 (以下次号)

今から丁度三十年前、私は東京  
 麻布三河台国民学校(今の小学  
 校)の六年生で、中学受験に励ん  
 でした。父は戦地に算数国語等の  
 教科書を持込んで、私の勉強に合  
 わせてその『解説』を便りの中に  
 入れて送つて来て呉れた。勿論内  
 地は紙不足等非常時体制の中にあ  
 って今の様な参考書類は殆んど無  
 い時代であつたから、その有難た  
 かつたことこの上無かつた。私も  
 『冷水摩擦をして体を鍛え、そし  
 て都立一中を目指して勉強に頑張  
 っています』と父に手紙を書いた  
 ものである。母と二人でその手紙  
 を横須賀鎮守府辺りに差し出しに  
 行った記憶もある。

その母も、父達の玉碎した翌年  
 の二十年三月十日東京大空襲の  
 夜、我々子供三人を残して父のも  
 とに去つて行った。  
 今私達は、敗戦と戦後の廃墟か  
 (以下15頁4段へつづく)

### 父からの便り

東京 井上 賀雄

南海の孤島マーシャル方面に、  
 終戦後二十八年にして漸く政府の  
 遺骨収集団が派遣された、浮田様が  
 老軀を顧みず大会を代表して参加  
 されたことは誠に有難く感謝に堪  
 えません。

仕事で多忙な毎日の中に私もい  
 つしか四十一歳。父の戦死した時  
 の年令になった。父の一生はこの  
 年で終焉し、私は更に長生きする  
 と思うと感無量である。来年二月  
 六日慰霊三十年祭を迎えるに当り  
 何かと想い出す儘を述べさせて頂  
 きます。

### 遺骨収集団を送る

秋の航南の環礁に 夫送り

藍膳の夫に夕餉の秋刀魚焼く

櫻代

南の空惚ぼるる ちぎれ雲

還り来ませ 三十年を 征きし君

宗丕

# ブラウン(エニウエトック) 玉碎直前の四十日

——運命のブラウン派遣隊(その二)——

岡山 高田源次郎

昭和十八年十二月三十一日

クエゼリン環礁エビジニ基地九五二空で私は飛行長と呼ばれた。「ブラウンに行つて呉れ頼む」と、私の様な若い飛行兵に飛行長が「頼む」とは……

ブラウンは当時情勢の悪かったマーシャル群島中の最悪の島であった。第一全然無防備であった。エンチャビ島は別としてメリレン島に至つてはわずかの測量隊設置隊十数名と現地民一家族が居るだけ。第二に蚊は居ないのだが蠅は目もあけられない程いる。食事は蚊張の中で食べないと一緒に口に入る仕末。夜は嵐の大群におそわれ爪迄かじられる。其上、害はないがヤモリが如かまわず、つくつくその気持の悪いこと。私は十一月中に一度派遣された事があり、そのような事を良く知つて居たので、「はい行きます」とは返事が出来なかつた。

「行き度くない気持は良く解るが重要任務であり、又経験者に頼むしか無いので一ヶ月だけ頼む」と再度云われて止む無く承諾する。当時、隊は十二月始めの米機動部隊の攻撃により、修理中のボロ機二機を残し全機を失つた。其の後必死の補給により新鋭機数機を整備したばかり。其の内の三機を

持つて行く事となり任務の重大性を知る。昭和十九年一月一日

最前線とは言つても正月の事、朝食は雑煮。其の後で慰問袋の配給と正月気分一ぱいの隊の中で、派遣隊員は早朝より準備に追われた。其の上「慰問袋は基地に送つた」と、私達には無い。準備完了。出発。川村兵曹長以下総勢十二名。三機の零式水上偵察機に分乗。私は三番機電信員として離水。二度と見る事がないかも知れぬ基地上空をゆっくり回りながら編隊を組む。耳の中で電信音あわただしく鳴る。暗号を訳す。「空襲警報発令」

急いで基地を離れる。一番機より図板の裏にテョークでザマミロと書いて見せる。機内の四人顔を見合せてニヤツとしながら基地方面を振り返る。今日からは敵も来ない孤島でノンビリ出来る。と言う気持もある。約三時間でブラウン上空に達す。先着しているはずの船が見えない。変だなと思ひながら着水し無事ブイにつなぐ。飛行場設備の無い基地では船と同じに、出迎える人も無い。機内は暑くなり、いくら待てども船は来ない。航空弁当も一機にまとめて積んだ為食べる事も出来ない。はるか彼方に通船

が一つ見えるが他には船らしき物は無い。一、二番機と相談するも誰も通船の櫓を押せる者は居ない。やむなく服をぬぎ、海に飛び込む。通船を無断で借り、全員を島に上げて航空弁当にて一息つく。ふと、蠅が居ないことに気付く。経験者数名気持悪がることになり。今日よりの私は通船係となる。海軍さんも駄目だ。この大ぜいの中で櫓を押せるのは私一人と

は。機子が解らず気持悪くて水も飲めない。早速ヤシの実で代用する。待つ事久し、夕日の沈む頃船来る。直に資材荷上、但、小さい棧橋には接岸できず、全員裸で海に投げ入れたドラム缶を泳いで砂浜のヤシ林に押し上げる。全く大した正月だ。疲れ切つてぐっすり

◎任務は内地よりの陸軍部隊の対潜水艦護衛。一月二日 早朝より出撃準備。当時爆弾積込は飛行兵の仕事であった。六〇〇通常弾四発ずつを先の通船(測量隊の物だつた)をフロートの間に入れて積まんとするに安定悪く、遂に転覆し、四発共海の底。おまけに全員ずぶぬれとなる。今度は砂浜で機を乗上げてやるが高過ぎて一ぱい差上げて駄目。木箱其の他を持って来ての悪戦苦闘の末昼迄にやつと全機積み終る。

二機対潜哨戒に出る。この時始めて内地よりの陸軍部隊の護衛と知らされる。私達は先に沈めた爆弾の引上げを計画するが、深過ぎて誰にも無理。海水がよく澄みすぐそこに見えて居るのに遂に果さず。島民に煙草を与えて頼んだら難なくロー

プを掛けて上がって来る。其の潜水の力には驚く。二機共無事帰投す。一月三日

日の出前より一機出撃。船団地点に向かう。片道二時間近い遠距離護衛である。常時二機は空にあり、時には三機共出て基地には予備の搭乗員が休んで居るだけである。一機帰投すれば直に燃料を補充し、搭乗員が交替して直ぐ飛立つ。一日に二回も飛行する。無茶な事だ。でも船団上空に来て暑い南海を超満員の状態で来る陸軍部隊を見ると「必らず無事入港させるぞ」と、決意を新たにされて疲れも忘れて上空直衝し、眼を皿の様にして海面を睨む。上空一時半、二時間交替機にホッと一息付く。操縦員と相談して「ヤルカ」「オ

ー」と、機首を下げ突込む。船団上空を超低空飛行。時には船の甲板が高く見える位に飛ぶ。船には人、人、人、甲板の上はおろか積荷デリックの上述全くの鈴なり。それが一斉に帽子を振る。大きな口をあけて何か言つて居る。私も、「又来るよ元気で」聞えはしないのに、バンクしながら高度を取り基地に向う。終日の護衛でクタクタになる。でも、無事三日を終る。

一月四日 日の出の出撃。船団は無事か。祈る様な気持で急ぐ。無事な船団を発見しホッとす。基地は目前だ、頑張れ急げ。押せるものなら押し度い気持だ。昨日より往復が短いただけだが、たつた三機で四ペアの搭乗員では無理な護衛だ。でもそんな事は言つて居られない。鼻血が出る様な飛行作業だ。無事水道を進む船団を夕日の下で見て我知らず「万歳」と叫ぶ。基地全員グッタリして休む。但船団と陸軍部隊は休む間も無く陸上

げだ。遂に夜通し続ける…… 一月五日 船団無事入港により、近海哨戒だけとなり来る。但宿舎を明け渡す様に陸軍さんより求められる。昨日迄の事を思い大いに立腹するも、此方は長が兵曹長。相手は陸軍少将である。到頭追い出される。全く無人の埃だらけの宿舎を忙がしい飛行作業の合間を見て片付け掃除してはと一息付いたら追い立てである。

何の事は無い陸軍さんの御偉方に掃除してやった様なものだ。と、ぶつぶつ言ひ乍ら設置隊宿舎に移動する。しかし、一般陸軍部隊は全員休む間も無く陸上作業を続けている。其の仕事振には全く頭が下がる。昨日迄の島は我等派遣隊員三十数名と、外、若干名で誠にノンキであった。用事の無い時は木蔭で昼寝。椰もなしの裸で泳いでも平気。それが一変した。陸軍さんの司令部が出来て心強くなつたが、衛兵所あり、番兵が居り、で、飛行服で通りかかる擦り銃、此方は下士官、答れにまごつく仕末。虱に全部食べられて釘の無い飛行服に大あわてする。又、哨戒終つて掃り隊長に報告の後休もうとすると、陸軍中尉さん、大尉さんにまたまた詳しく聞かれる仕末。これが又、独特の節度で固苦しい態度で全く肩がこる。よしこころで元気の有る海軍を?見

せねばならん?…又昼間のウサはらしと飛行兵全員の持金を集める(大した事は無い。絶海の孤島では要らないので)駆逐艦迄ゴム艇で買出しに行き、艦の好意によりビール等に分けて貰い底抜けにさわぐ。此の大騒ぎには陸軍さん目を丸くした様であった……

一月六日  
数回の哨戒飛行の外は用事無くノンキに日を送る。そろそろ蠅が出て来た。陸軍さんの出す汚物と水不足のためヤシの実の水を飲んで捨てたカスによるものと思われる。此の島では蠅はなつかしい様な気がする。

陸軍さん四千人上陸したと聞く。自動車から戦車も見える。此の小さな島でどうするのかな……

一月八日  
船団クエゼリンに向け出発す。またまた護衛して飛び続ける。船団には陸軍が未だ半分乗って居ると聞く。無事本隊に引継ぐ。

◎のんびりした孤島の旬日  
一月九日  
今日より全くのんびきな島の生活である。近海の哨戒の任だけで陸軍さんの作業を見物する。「タコッポ」なるものを始めて知る。陸軍さん自信まんまんの陣地が出来上る。この頃東、東北の出身者ばかりにて同県人無くガッカリする。戦後一寸した事情で当時の測量隊長さんが隣村出身であったと知る。

される。そのベアの内に同期生柴田君が居た。百万の友を得た気持である。内地より空輸中の水漬が立寄る。先登川本兵曹に依頼していた釣道具とバリカンが到着する。

早速釣を楽しむ。なおバリカンは先登達に取上げられた。丸坊主頭を派遣隊で長髪にしたかった様で器用にスツ刈りをして飛行兵全員がオンシャレを楽しむ事が出来た。この時始めて柴田君の器用さを知る。

島民のカヌー修理等を見学しながら毎日を楽しく送る。本隊の者達に済まない様な気がする。

一月十日  
一機増強と同時に他にも増員有り。水偵四機。飛行兵は兵曹長二、下士官兵十三。整備兵外を入れて総勢四十二名となる。但し美族的空気と飛行兵のわがままで美味い物が消費して次第に不味くなる気が見えた。今日はダイナマイトで魚を取る事とする。初めてカヌーに乗る。片方に補助舟の付いた舟である。丸木舟で無く板を細でしぼり合せた細い本体と補助舟との間を細い丸木で台を作り、ここに走る様にしてある。大きな帆で乗るがとも速い。途中一寸位置を変わらうとして島民にいかつされる。今日は島民が船長だ帆走中動く不安定を悪くして転ぶくする事があるとの事だ。良さそうな位置でカヌーを止める。ロープを持って島民が潜る。リーフ(サンゴ)にしぼって来る。錨の替りだ、これならば流れる心配なし。ダイナマイト一発

で大漁だった。二人で担ぐのがやつの位。飛行兵全員で料理にかかる。陸軍さんに無理言ってヘットを貰って天ぷら、サンミ、煮付、等々、美味しい美味しいと食べてくれる。次の食事にはゲード……

一月〇日  
飛行しない時は暇でかなわん。又何か変わった物が食べ度くなる。毎日乾燥野菜ではウンザリ……。さりとりて島民の焼リンゴ(ヤシの実を焼いたもの)と交換する物(たばこ)が不足して来た。柴田君と二人で焼き方の盗み見を計画する。見張台の上にて島民の焼くのを遠望する。

一月〇日  
今日は焼く様子だ。十五糧高角双眼鏡遠鏡にて見る。手に取る様に見える。準備から焼く迄スローモーションの島民を逐一二人で交替で目を離さない様にして記録する。暑い見張台の上で好きなのだ。島民のやり方は何の事は無い石焼の方法だ……

一月〇日  
昨日より続けて見るに取出す気配なし。朝より午後半ばまで辛抱強く……。

島民のやるとおりにこちらもやってみる。何とか焼いた。夕方島民の取出すのを見る。明日が楽しみだ。

一月〇日  
夕方取出して見る。一寸心配だ。割って食べる。飛び上る程美味い。飛行兵全員に食べさせて驚かす。

を持って来た。此方の焼いたのを見せると、「兵隊さん盗んだ」と、カンカン。説明しても片言で通じない。時々眼鏡を見せるとビックリ。焼いた跡も見せてその上煙草をやって承知して貰う。考えて見ればヤシ全部島民の物かな?。しかしヤシ四本あれば一人の年中生活に不自由しないとか、解る様だ。以後柴田と二人焼リンゴ製造係にされた。

一月〇日  
陸軍さんがタコッポ陣地を自慢する。上からは見えないだろうと威張るので「自分達が敵であったなら陸軍さん一人々々射殺して見せますよ。飛行機を甘く見てはいけません」と注意する。

一月〇日  
昨日の事が少将さんに聞こえたらしい。飛行機に乗せられとの申し出あり。隊長承諾。来て貰う。操縦目(さつか)兵曹、電信が私で中間席に少将さんと大佐の二人を乗せる事とする。飛行服と靴を貸出す事を申出るのがこのままで良いと言ひ張る。

どうも汗臭い下士官の物など着られるかと、言うも聞き入れず命的に高飛車に出るで此方が折れる。鉄板のある長靴のまま翼の上をガリガリ歩く。余計腹が立つが相手は将官此方は下士官ではどうにもならない。愛機よ辛抱しろよ。

離水して陣地を見て廻る。全くの丸見えに驚いた様子である。満州の広野とこと違い青々とした南海の島々の木から取った葉は一日にて色の変る事を知らなかった様

だ。次の島に行く、同じ事。この辺で目(さつか)君に一寸やれと言ひ。彼笑ひ乍ら低空飛行から急旋回に移る。モットヤレモットヤレとけしかける。中間席の御偉方グロッキーの様子。一寸やり過ぎたかな。基地に帰る。機内より自分では出られないお二人を見て皆ニヤニヤして居る……。やっとな降りて砂浜をフラフラ。でも一言。

「有難う君達の大変な事が良く解った。何回も陸軍機に乗ったが今日の様な事は始めてです。気を付けて飛んで下さい」と、出る時の鼻息は何処へやら。目君と目目とニヤニヤ。でも今日位の飛行で参って居たら水偵搭乗員は勘まらんのだが……。

後で隊長に御目玉一つ。でもこの日より陸軍さんの我々に対する態度が変わったし、早速陣地の方法も変り、生きたいヤシの下に入る様にも変り、生きたいヤシの下に入る様

◎風雲急となる  
一月二十八日  
蚊張る中にて昼食中、突然の爆音と共に銃声がかかる。直に退避早かった……。昨年十二月末迄の連日本隊での事が思い出される。海岸より柴田君が飛んで来た。B24に一機やられたとの事だ。フロートに数発の被弾直ちに海岸に押上げて本隊に報告。「明日水偵二機にて交替員と工作員を送る」との電信あり。明日は煙草その他も来るし。この内六人は本隊に帰れる。誰と誰か……。楽しみにし寝る。

(以下次号へつづく)

# マーシャル戦記

—その四—

## クエゼリン初空襲

木ノ下 甫

2月1日 (昭和17年)  
日記

「午前3時55分。夢うつつの中に異様な音を聞く。ヒューッー忽ちズンズンと窓外近く椰子林の中に巨大な火の柱二本、黒煙の中に紅蓮の火柱だ。何事ぞとはね起きて空襲と悟る。瞬間、どこから来たかと怪しむ。

どうにか防護服をつっかけて、下駄ばきもどかしく走り出て司令官庁舎を見れば、慘、司令官公室、私室附近、ビシャンコに溢れて、しかも音なき静けさ。

「やられた！畜生」  
と思わず口走る。走りくる兵員にくすぶる煙の消火を令し、走りよると機関長無事に出て来られる。これは見込みがあると、北側に先任参謀をさがしに行く。足の踏場もなく、きな臭い。唸り声にかけよれば砕けた木材の間に先任参謀だ。思わず、

「先任参謀しっかりして下さい」と抱き起すと  
「何、どうしたどうした」と云われるが、両股の肉ごっそり削られた重傷に、すぐ又倒れてしまう。

「誰か来い！」と怒鳴ると、機関参謀来る。従兵も一人即死らしい。司令官はともだめと思つて、戸板を代用に折から集った軍夫にかかえさせて先

任参謀を病室に送る。(空襲警報は発令している)  
裏へ廻ると今しも司令官を送る所、既に即死と見て、思わず、後から頭を下げて冥福を祈る。

その頃漸く各艦及び砲台の砲火しきり、雲間には二機三機、未だに青色の翼を悠々旋回する敵機「靖国丸火災、潜水艦一隻火災沈没」

の報あり。情況を見に走らせる。敵機は又一しきりエビジェの方に急降下。(十九空水偵基地)、ズンズンと爆音。飛び交う曳光弾。皆を防空壕附近に待機させて裏庭で指揮しつつ、各部に電報を打つ。そのうちにタロアから、ウオッセから敵航空母艦一隻、大巡二隻の近接砲撃の報あり。ルオット、ヤルト又空襲され、マキンにも九機来襲、ミレにも来襲と。各所を分撃したらしい。やがて六時半頃敵機一先ず去る。裏庭にテーブルを据えて「おにぎり」の朝食。ジャポール(ヤルト島最大の街)に数弾と、心痛限りなし。胸苦しき臭いに香水を襟につける。

先任参謀を防空壕内にたすねる。呼吸苦しうだが意識ははっきりして居る。  
「あとと心配なく」と引き受け出てくる。六根司令官代理、六防司令。指揮官六通司令との電令

来る。終日裏庭。ウオッセ砲撃のため艦艇全滅。鹿島丸、ボルドウ丸沈没。十一昭南丸、豊津丸坐礁、大破。十昭南丸不明と。その他の被害は案外少なく、只ジャポール島民百名、邦人三名の即死と八十数名の負傷者には同情に堪えぬ。この夜、満月に近い名月である。追撃、母艦だけでもやっつけたいが、今の所26潜のみ。たのみ24航戦の明朝の痛爆をたのみみだ。この日タロア六機、ルオット五機撃墜、大巡二隻に爆弾数発命中、火災を生ぜしむ……」

後記  
当時の第6根拠地隊司令官は八代祐吉海軍少将、先任参謀は法元廉海軍中佐であった。

クエゼリンはマーシャル群島の中心に位置し、24航戦の陸攻隊が、連日東方洋上に哨戒索敵飛行を扇状にやっていたから、まさか直接奇襲を受けようなどとは思っていなかった。全く寝込みを襲われたのである。第一撃が司令官公室に命中し、司令官は即死、先任参謀は重傷を負い三日後に死亡されたのである。

クエゼリン、ルオット、タロア、ジャポール、ウオッセの四

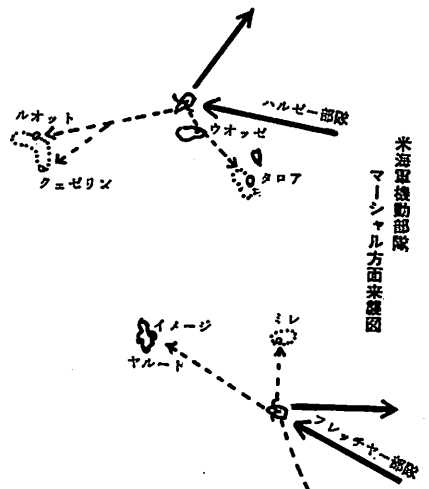
島に空襲を加えたのは、米海軍の第8任務部隊で指揮官は牡牛と仇名のある猛将ハルゼー中将で、旗艦は空母エンタープライズ。その指揮下で大巡二隻、駆逐艦二隻でウオッセを砲撃したのがスプルーアンズ少将、タロアを砲撃したのは大巡一隻、駆逐艦二隻であった。いずれにせよ陸攻機を有するタロア基地に迫り、空母が陸上から視認できるところまで近迫して、連続空襲をかけたのだから、大胆不敵な戦法であり、敵ながらも天晴れであった。これに反し南方からヤルト、マキン、ミレを空襲したのは第17任務部隊で、指揮官はフレッチャー少将、兵力は大巡二隻、駆逐艦四隻、タンカー一隻であった。この部隊は遠距離から一回空襲しただけで、それもジャポールのような原住民部落を主として爆撃し六機を失っている。その内二機が、ヤルトのビングラブ島に不時着して六名が捕虜となった。この捕虜の訊問で敵情が判明したのである。

空襲時、クエゼリン港内には、常磐や六艦隊旗艦香取と平安丸、靖国丸等の母艦や潜水艦九隻が在泊していた。その他十数隻の艦艇が碇泊していた。碇泊のまま、攻撃されては危いので「緊急抜錨」を指令したが、敵雷撃機九機は抜錨前に来襲して来た。水面すれすれの低空で近接する敵機に対し、我艦艇は対空砲火だけでなく水平砲も一斉に発砲した。この反撃に辟易した敵機は二千米位で魚雷を投下して遊退したので、一発も命中しなかった。

その点我機動艦隊将兵の技術とは大部差があることを実感した。その際各潜水艦は緊急着底して雷爆撃を回避した。これを見張員は沈没と思つて報告したが、敵機が去ると又皆浮上してきた。

ウオッセ島を砲撃した大巡二隻と駆逐艦一隻に対し、同方面海面防備部隊の艦艇の反撃水戦は、大楠公の湊川の血戦にも比すべき壮烈なものであった。指揮官大田大佐の豊津丸は、特設砲艦と云つても大砲一門に機銃しかない商船であったが、全艦艇を率いて湾外に出撃砲撃した。敵弾数発を受け浸水甚だしく艦長は岸に擱坐し、尚残る機銃で反撃を続けその機銃員もやがて全滅した。第十昭南丸も敵に突入り砲撃したが、これ亦砲撃を受けて沈没した。鹿島丸も礁内から出撃、攻撃に向つたが撃沈され、第十一昭南丸も敵駆逐艦に命中弾を与えたが、艇長戦死し、しかも最後まで砲撃して敵を撃退した。

我方の主力とたのむ航空部隊は、ラバル方面作戦のためトラ



米海軍機動部隊、マーシャル方面来襲図



ックに派遣されており、この方面には、その一部しか残っていないが、誠に残念なこと、長蛇を逸する結果となった。即ち、タロアには戦闘機十五機陸攻九機、ルオットに戦闘機一八機がいた。我方の反撃で、敵機数機を撃墜した。陸攻機は爆撃で巡洋艦、母艦を攻撃したが、敵機の妨害で、命中弾を得られなかった。只タロア砲撃中の巡洋艦に対し、戦闘機の爆撃で命中弾二発を与えて小破したにとどまった。

敵機動部隊の初空襲は、一応奇襲に成功して、マーシャル方面に一撃を与えたが、その戦果は大したことにはなかった。しかし八代司令官、法元先任参謀を失ったことは誠に痛恨事であった。マーシャル方面防備部隊にとってこれは痛烈な戦訓となつて、その後の防備強化に一段と努力を重ねることとなったが、何としても不吉な運命を予告するものであった。

戦争 (私の場合)

東京 鮫島 みさを

二十年八月九日早朝奉天市内には空襲警報が鳴り響いた。丁度その日は防空演習の予定の日だったので警報を聞いてもさして驚かなかつたが、いつもの演習と違って朝早いのが、1、3、4才の三人の乳幼児を抱えた私を慌てさせた。子等の父なる人は、応召中である。明るくなり配達された朝刊一面の黒枠でかこまれた白文字の「赤魔越境」の大文字に仰天した。

日頃の大本營発表を信じ関東軍のみでソ連を相手かできるという言葉に安心し何時かは日本が勝つてこの戦争は終ると思っていたから。大通りには戦車を喰ひ止める為の擁護りに呼び出された男の人達が口ぐちに何か大声で叫ぶ様に言い乍ら察を掘っていた。昼頃隣組長を通じて「子供のある人は至急集団疎開するよ」の命令で一人を負い左右に手を握り町内の子供連れの主婦連數十人と夕刻汽車で奉天を離れた。汽車を降りしばらく歩き夏の日も暮れかかる頃着いたところは寒村の小学校が廃校にもなつたのか屋根はあるが戸も窓硝子もない大きな建物だった。三日か四日するとそこも危くなり荷車で他へ移る事になった。一緒に来た人で妊娠末期の人がおり陣痛で木蔭で苦しんでいた。皆が出発の時も一人で木の蔭に横になって苦しんでいたあの人はどんな道を歩かれたらうか。移ったところも又二、三日で危険との事で他へ移らねばならなかった。今度は山の中で近くに家らしい物とて無く食糧が入手できずに困った。時々満州国人が売りに来る青い小さいリンゴを食べていた。母乳がでなくなった母親達ばかりで細く噛んで汁を赤ん坊に吸わせた。多くの子供達は下痢に悩まされ又、全身におできででき困った。敗戦を知らされたのは十五日を何日も過ぎてからだった。母達がむせび泣くと子供等はモンペにつかまって小さい声で泣いた。

奉天に帰った。奉天の空家には疎開の人々が割り当てられて住んでいた。子供を三人も連れていたので満州国人が「子供を売れ」と後をつけるのには気味が悪かった。あまりしつこい人には両手で首を締め自殺の真似をするに妙に離れて行った。通りではよくソ連兵に追いつめられ連行させられる日本人の男の人を見た。若い女性がソ連兵に連れ去られ棒とし反抗し撃たれ死んだのを近くの家の人々が防空壕に入れ線香を上げていた。火葬も出来なかつたのである。暖房の無い冬を赤ん坊は負い通して過し上の二人の子は冬中布団の中で寝かせて寒さを防いだ。生活費は衣類を売って米や味噌を買った。赤ん坊は引揚直後肺炎で死んだ。内地へ帰ったも夫も弟も還つて来なかつた。ただ中身の無い白木の箱が届いたきりだった。戦場だとて自決の自由位はあったと思う。三児を連れた私には自殺の自由すら無かつた。思い出とは何であらうか歳月と共に苦しみも悲しみも風化し思い出はただ懐かしいものと聞く思いは鮮明さを増す様な気さえする。まるで二三ヶ月前の出来事の様にはつきり思い浮べられるのはまがりなりにも戦いの無い国に三十年近くもあれから生命の灯をともし続けてきた故か、思い出すとあの頃の自分が哀れでならぬ。いつだったか住宅の事で都庁に行った事があった。「引揚母子です」と言ったら係りの人が「もう戦後ではない」と当時流行していた

た言葉を私に返した。その人には戦後ではなかったのだらうが私には毎日終戦記念日なのである。生へ最後はの別れを告げる時、逝く人々は何を思ったであらうか。屹度自分を生んだ国の将来を想い、残してゆく家族に思いをはせた事と思う。戦歿者の父母達は古い、妻達もまた老境を迎えている。この国の経済力をもつて遺族の晩年の生活の不安を無くす事は出来ないものだらうか。給料を貰つて勤めいた公務員は定年後月々数万円の年金が入ると言う。命を国に捧げた者の遺族に僅かの年金しか渡されないのは何故であらうか。

クエゼリンの兄より

東京 前原 寿美子

先日佐賀の従妹から亡父の文箱の中にこんな物が入っていたのでといて送つてよこしました。兄をととも可愛がってくれていた叔父で、兄も尊敬しておりましたので、辞世の歌を送ったときのもので、幸いです。どうぞ読んでやって下さいませ。

本懐至極として笑つて散つたことであらう、家門の誉亦之に比するものはなからう、詠じて之を弔う武士の 誉なりけり 畏くとも たつとき方と 共に散るとは 深く 散るにも時と 所あり 君の今はぞ まこと花なれ 大君の 御楯はかくぞ 目をみ はり 醜等見よとて 玉と砕 けぬ 太郎さんより一月二十一日附の端書に左の如き歌あり。蓋し辞世と云つた。

磯波に 小茂田の浜の偲ばれて みこと畏み 此島守る 之に感激して詠す(小茂田浜は対州西海岸にあり。元軍来襲の際宗助国等全滅の地)

無念なり 小茂田の浜の昔をば 二度みたび 繰返へすととは 浪騒ぐ 小島の小椰子 月暗し 嗚呼古里の 月よ光れよ 我(注、前原寿美子)には、私 がとても悲しむと思つて、のん気なハガキを同日よこしておりました

「表記のところに転任して、お正月早々着任した。首席参謀だ。えらく聞えるだらう。酒席乱暴なんてことはいらない。朝らかに極めて元気にやっている。からかいてくくれ。高岸宅にもよろしく伝えてくれ。新一も心機一転して勉強する様子。国家の御役に立つ様にうぢ見れば、月や小椰子に かげさえて 磯浪近く とどろき渡る

一月二十一日

横須賀郵便局 宛付 ウ九〇ウ四九 平田 太郎 寿美子殿

# 私の戦争体験記

秋田 小室舜司 郎

村役場の係が赤紙の召集令状を届けてくれたのは、昭和十六年十月十七日午前でした。見れば、十月二十五日横須賀海兵団入団、とあります。支那事変勃発して足かけ五年、私と同年輩の陸軍の方々は殆ど応召、赫々たる武勲を立てて奉公終って帰還された者、また名譽の戦死をされた者もありました。

戦争はまだまだ終りそうもなく、それでも支那では海軍の必要はそれ程ないでしようが、いつか自分にも赤紙がと考慮しておりました。その頃対米外交関係は日に日に悪化する一方でした。

山形の同年兵から「俺は舞鶴に召集入団した。お前ははまだか、必ず召集があると思う、いよいよ再起奉公の秋至れりだ、互いに頑張ろう」というのがきを受け、いよいよ来るかと思っていた時であった。その日は獲入れ時で馬に稲をつけて家に運んでる時で両親は共に六十才を越え、妻は小学校三年の長男を頭に五人、六人目が臨月、それでも作業に一生懸命二人でやっていた時であった。妻は生めよ殖やせよの国策型で、代って終戦後は一人も生まない、産児計画の標本みたいな妻です。

そして家を出たのが二十三日午後、旗の波万歳の連呼「天に代りて」「勝って来るぞ」と軍歌、欲呼の声に送られ、みんなに「留守

宅など心配せず働いてくれ」と励まされ自分でも、「昔とつたる杵柄だ。いつかこの日が来るものと五年も前から考えていたのだ。男子の本懐これに過ぐるなし。やるぞ何かバット手柄を立てアッといわせよう」などと、功名心と名譽欲が湧く一方、心のどこかで再びこの家に生きて帰られるかどうか、死ぬかも知れないと、複雑な気持ちの門出でした。

二十五日入団、身体検査も合格。入団者は皆顔見知り一年先輩と同年兵が殆んどで、「オウお前もか」「貴様も来たか」と十余年振りに会う友は皆頭髪薄くまたは霜降り。額や目尻の筋は深くは往時の面影があり懐かしき一杯、暇さえあれば話は尽きなかつた。国ではその頃対米交渉が盛んに行われ野村大使がル大統領と会談するとか、来船さんが米国へ飛ぶとか、ラジオ、新聞等を賑わしていた。無責任な私達は、何をグズグズしているだろう、ガンと一発やればいいのに、勝手な口をきいておりました。

一方では同期応召組中昨日は〇〇陸戦隊〇百名編成、今日は〇〇九乗組〇百名出発と毎日次々と出て行き、また次々と応召入団者も入ってきました。十月二十五日入団者の殆んどが出たが私達は品質が悪いのか売れ残り十二月八日となりました。

前日七日私は泊り番で外出し、八日朝平日通り帰団したところ黑板に大きく「我が帝國は米英に對し宣戦布告、本未明我が海軍航空戦隊はハワイ真珠湾を攻撃大戦果を挙げたり」と書かれてあった。いよいよやられた、誰も次々に入ると大勝のニュースに小踊りし、先に任地に発つた友等皆それぞれ戦線に向つてるだろうと、羨しくなりました。

そうしている内ようやく同月半ば過ぎ、私達残残り十余名次期入団者(大体二年先輩)その他が特設第二十八掃海隊乗組の命を受け掃海艇機装中の横浜に転じ、明けて十七年一月初の艦装終つて津軽海峡警備部隊となり基地大湊に向いました。

南方での連戦戦勝の報を聞く時、北海道に煽ぶつてるのが物足りなかつたが、古将の教えに「東に事ある時西を守れ」とあるとか奉公に変わりなしと、十八年は樺太千島方面、十九年は沖繩台湾方面と哨戒、船団護衛の任に当り、その間敵潜攻撃回となくやりましたが、これなんとも地味な戦闘で相手が見えぬ戦果が判然とせず誠に味気ない戦いでありました。

そして十九年十月月初陸上部隊に転じ、父島特別根拠地隊対空機銃砲台二十五耗連装機銃長として父島に渡りました。輸送船に乗込み駆逐艦の護衛で母島と硫黄島へ渡る部隊と同船し横濱を出港しました。硫黄島部隊輸送指揮官近江兵曹長は近村出身であることを知り言葉交しましたが、これが最初で最後となりの方々、これが最後のことでしょう。

出港して三日目、父島入港の前日暮方敵潜の雷撃を受けたが幸い発見が早く魚雷三本共船尾スレスレに交し駆逐艦が盛んに探索、攻撃し「敵潜撃沈す」との信号あつたと聞いた時「アアよかったと思いましたが、明くる早朝父島より偵察機と魚雷艇数隻が来てくれた時は涙が出る程嬉しかった。

こうして無事父島上陸。その頃住民は全部本土に疎開、数回の空襲、艦砲射撃等で民屋や軍の施設は総て破壊され惨憺たる傷跡でしたが、十月中は過ぎなのに暑いくらいで気候よく空も海も明るくそれで非常に気持ちよくこれが戦争でなければいつまでもいたいような島でした。私達が任に就いたその日から敵機飛来度々で偵察らしく高度を高くとつて島の周辺を回って行く程度でした。敵が飛石伝いに北上、グアム、サイパン島進出の頃から毎日大型機編隊爆撃の連続で地上生活不可能となり、全員防空壕生活に入り対空砲以外総て壕内に入れるという一大陣地構築。そして二十年二月遂に敵は硫黄島攻略作戦となりこの時は艦載機数百機昼夜間断なく波状攻撃、加えて大型機の爆撃と文字通り島の形が変る程の激戦で彼機の犠牲も大きく我が飛行場は使用に耐えなくなり数少ない飛行機も全滅となりました。敵機も相当数撃墜し、火を噴いて落下する飛行機を見て万歳を叫び喜んで見るのも戦争なればこそこれが平和の今日なら國の何れを問わず喜んで見られぬ惨状でしょう。戦争は人間の心を野獸化するものです。そして遂に硫黄島玉碎。

もう敵は目の前に居るのだからそれからは毎日毎夜の空襲。次は父島上陸の公算大などとの噂もあつたが、その内沖繩作戦が始まり父島には来ないだろうと勝手な想像もしてしまいました。その頃は制海権制空権共全く敵の手にあり本土からの補給は完全に杜絶し、物資不足となり弾は大事に使え、飛行機をできるだけ近寄せて射て、また食糧は長期戦に備へ減食、少量の米に雑物混入し水ばかり多い雑炊食となり栄養失調で倒れるものが出るようになった。食糧自給とのことで、農耕班漁撈班をつくり穀物の開墾、また海水を汲み上げ塩を作り、空襲の危険を冒しての漁獲と、木でも草でも食えるものは何でも食べ、南瓜やさつまいもを作つても実を待たず葉や葉が出れば直ぐ食べました。またアフリカマイマイとかいうカタツムリ的一种はよく食べました。苦勞して作つた作物も空襲で吹飛ばされたり焼かれたり、また敵を切払い開墾作業中敵機のバラ撒いた焼夷弾で負傷するものなど、食う為にあらゆる危険を冒さなければならなかつた。

相変わらず空襲は毎日、これが若し敵が上陸戦で来たら物量の勝負に對しては勝目はなく、また長期戦になれば栄養失調で死ねるのだし、もともと覚悟した体だ、敵上陸となつたら、本土に通信のきく内に決死隊なり特攻隊を志願しバツと手柄を立てて故郷に花を咲かせようなどと戦友等とよく語り合っていたものですが、当時の言葉でいえば武運拙なくその機に至らず、八月十五日となりました。

その日午後各隊長本部へ集合の達しあり、上条砲台長（学徒中尉）が行って帰り、夕方総員集合あって「本日正午天皇陛下のお言葉があり戦争は終わった（敗けたとはいわなかった）これから敵が攻撃せぬ限りこちらから撃つな」と聞かされた。その瞬間、不覚にも恥かしながら「アー生きられた。もう死んでもよいんだ」と直感した。誠に浅ましい考で、會員の皆様の前では心にあつても口にすべきでないでしょうが、これが偽りのない私の実感でした。

常に死を覚悟していても私はやっぱり生きていたかったのでしょう。私とて敵前で死ねれば何の悔もなく至極当然と総てを諦め喜んで九段へ行ったでしょうに何と不甲斐ない私、恥しくともいえない言葉でありませんが罪滅しのため恥を覚悟しお国の為には散る花よと笑って靖国神社へ行かれたと思ひますが、覚悟の死であつても思ひから命を断つ自殺者の心理とは違ふ何かがあつたでないかと、自分の体験からそのように思います。戦は終つた生きられたと思ひながら、これだけ国民みんなが頑張つたのに敗れたと口惜しさ残念さ情なまで腹立たしく、その夜はだれ一人笑う者なく今後どうなるかといつまでもいつまでも語り合ひました。

今まで張詰めた気の緩みか何か空虚な気分と今後の不安が重なりうらにいえなぬ複雑な気分その

後の数日でした。その内米艦が湾外に現れ、これに武器を外した我が魚雷艇が白旗を立てて行くのが山の陣地から見えました。とてまともには見られませんでした。やがて武装解除命令が出て、武器は全部尾栓を外して本部前広場に集積、弾薬は湾外沖合に運び海中に沈めよ、とのことでその作業に数日かかりました。生死を共にし何千何万発が敵機目がけて射つた機銃を陣地から卸した時は、我が子に別れる思いでつらい感じでした。最早使うことのない機銃であるが部下と共に最後の手入れを充分にして広場に届け別れて来ました。数日経って所用あり本部広場行つて見たらよくもこんなに沢山あつたものかと思う程大小の砲から機銃小銃その他数々当時の新兵器噴進砲等無数にありました。その中の自分の機銃は直ぐ判りました。一段と手入れよくしてあり非常に懐かしと思わずなですり帰りには何回も後振り返りまたも愛児に別れる思いの繰返しでした。

終戦後は防空壕を出て有合せの材料でバラックを建て、長期戦に備えた貯蔵食糧も放出で平常食に戻り十一月中頃復員船が平港復員開始、私も早い方で同月末涼風丸に便乗復員しました。十六年十月応召、家を出てから満四年余りで、もう行かなくてもよいよと、家族の待つ我が家へ十二月一日朝帰つたのです。私応召中少暇を得て三回程帰宅しましたがまた家を出る時いつも老父母は、「また行くのか体に気をつけてまで働けよ」と励ましてくれるのでした。これは父母が自らを励ます言

葉のようでもありました。戦争で二十年前のクイズが解けたことがあります。私大正十三・四年頃山内青年団（合併前山内村）幹部青年移動講習会で二泊三日の県内先進地巡回見学をした夕食後の一時時引率者の一人が「自分の母と妻が水に溺れ助けを呼んでる時だれを先に助けるか」と冗談まがいの質問を出しました。みんながそれぞれ勝手な意見をのべ「年老いて先のない働きもない母より若く働き手の愛妻の方が先だ」とか、「いや親の恩は海よりも深い」とか意見がわかれましました。

覚悟せねばと考えられる、その頃本土の情報など全く入らぬ時であつたのに、どこで聞いたか、または当すっぽうなのか同郷出身の兵隊が、「横手に中空裏があるぞうだ」といふ。本土決戦にあるのか、その場合私が一番心配するのは小さい末子であつたし、次は老母であつた。妻ならどんな時でも自分の判断で行動できるし大きい子供は何とか一人でするだろうが小さい子は自分では何もできない。老母にしても同じで六十才を越え腰は曲り行動は鈍くこれが戦火に巻き込まれ敵が目の前に現れたとしたら何もできる筈がない。こ

う考えると弱い者程案じられるのが自然で母と妻の水溺れる場合も若い妻なら何とか自力でも考えられるから弱い母の方に自然手がでるだろうと判りました。これも戦争で生死の境に立たねば解けなかつたでしょう。横手の空襲も嘘でなく復員して見たら六月末と七月中頃の二回に亘り艦載機の銃爆撃あり一人死亡のことと爆撃の跡

も駅前はまだ残つていた。戦死した弟は昭和十一年一月入団、四等兵教育を終えんと駆逐艦汐風に乗組み揚子江警備の任に就き、その論功で同年兵では数少ない満州事変従軍記章と賜金を受け、支那事変に入り十二年十一月上海呉松青島の敵前上陸に参加、その後艦船にまた陸上に勤務、十八年頃は大本営海軍部に勤め、十九年ウオッチェ島に転じ二十年二月二十三日夜戦死。入団以来約十年間戦争で明け暮れ最後まで祖国の勝利と信じ遂に還らぬ身となりました。私が応召した頃は巡洋艦利根乗組でしたがどこに居るかかわからず弟は大体南、私は北で同じ横鎮管下に在りながら一度も会はずにしまいました。違つて居れば早六十近い初老、子供も大きくなつた頃会えば想ひ出話は尽きなかつたらう。

我が友また知り合いに数人の戦死者があります。こうして亡くなられた方々の霊は、生きて還つた私達が慰めて上げなければならぬと思ひます。靖国神社には体の丈夫な内は毎年参拝に行くつもりで居ります。

本会毎年の慰霊祭には大勢の旧戦友の方々が参拝に来て下さいませ。英霊はどんなに懐かし喜んで迎えることでしょう。私達遺族もほんとうに有難く感謝の念で一杯です。今の若い人方は軍隊とは冷酷の塊みたいなもので上下の差が厳しく悪いものの典型のように考へて居るようですが、本会毎年の直会旅行の先で旧軍人の方々が非常に欲待して下さいます。一昨年城ヶ島では長島支配人、昨年太

海では浮田様元部下相川さん、今年大浦谷では佐藤様元部下山菅さんが態々訪ねて来て何かと御協力下さいました。軍隊が悪いものでしたら元上官と部下とが心から喜んでこうして会えるでしょうか。この事実を見ても解ることです。戦争そのものについては申すまでもなくあれだけ大きな犠牲を払い敗れた国民みんながその良否を解つたことで、まして身を以てあの悲惨な場面を体験した私達は戦争を知らない若い人達よりよく知つており再び戦争を考へる者は一人もある筈がありませんのに若い人方こそ何としたことでしょうか。戦争反対意見高らかに唱えながら過激派学生の乱闘事件やら少し古いが、よど号事件から浅間山荘、テラアビブ、ドバイ事件等々戦争に勝る残虐行為。

言うに語るに絶すことを平氣でやるとは（一部の若者達でしやうが）私達にはとても考えられないことです。

このような若者の出るのは何が原因何の欠陥からでしょう。私は学問のことなど解りませんが学校教育に戦前と違ふ何か不足があるのではないでしやうか。

古い記憶を想起し自分の体験を経て懺悔し戦死者の心境を偲び霊をお慰め致し度く綴りましたが、過る二十八年三月二十五日夜失火に依る火災で丸焼けとなり少しばかりあつた資料も一切焼失、三十年前を振り返り躓げな記憶を辿り綴つたので感違いなど多分にあるかと思ひますが、當時を想ひ起しそのままだ記しました。

合掌

### 三十年祭を迎える にあたりて

東大阪市 堀江 かつ江

昭和三十三年三月六日、靖国神社にてクエゼリン島戦歿者二十年祭が行われましたから早くも十年は三十年祭を迎える年となりました。

思えば二十年祭に参加して初めて亡夫の戦死した島がエビゼ島であったこと、昭和十七年十月に着任して玉碎に至るまでの一年三月の戦場生活の労苦などが林幸市様の戦況報告により、又「クエゼリン島の今と昔」の戦記によってくわしく知らされました。それから亡夫を知る方々のお話等々……

もし今まで私たちの遺族会がつかられていなかったらどうでしょう。何も知らずに人生を終るやもわからなかったのです。その遺族会の結成に一方ならぬ御尽力を賜りました初代会長林茂清様、顧問の石橋湛山様はすでに御令息の許に逝かれました。二十年祭の時のあの力強い遺族結集への呼びかけのお声が昨日のこの様にはつきりと思ひ出されてまいります。三十年祭を迎えるにあたりまして改めて深謝の心と共に御冥福をお祈り申しています。

又五年前の五月にはわざわざ京都までお越し下さいましてマール方面の生々しい戦跡めぐりこの御報告を頂きました浮田様、佐竹様のお二人にはずっと引つづいて遺族会のお世話を頂いており

ます、厚く厚く御礼申し上げます。やがて私も人生の定年を迎える齢いとなりませんが現在の私は身体は健康に精神は安穩に日々是感謝の中に暮らしています。

今わが家には一昨秋、靖国神社に参拝しました折、社務所で頂きました神木の苗「車輪梅」「公孫樹」の二種、本年春に再び参拝しまして「ピラカンサ」「棕栢」の二種を頂き計四種の苗木が鉢うえ栽培には不適当と思われる団地のコンクリートの上ですくすく成長して長じています。これは正しく靖国のみたまのお守り下さる故と思えばおのずからわき出すは感謝の心でございます。

明年の三十年祭には是非参加いたしまして心に生きるみ霊に感謝を捧げ、同じ境遇の遺族の皆様にお会いしてはすきに三十年の歩みを語り合うようごびに心はずませてその日を待つております。

今日は命日にあたる二日でございます。香煙たちのぼる仏壇を眺めつつ遺族会の運営に御苦労下さっていられる役員の皆様亡夫ともども厚く御礼申し上げて拙い一文を終らせて頂きます  
合掌

### 会員のお便り

新 潟 安 沢 隆 平

拝啓 本会運営のため、献身的御努力御奮闘下され、只々感謝の至りと御礼申し上げます。

○会費増額の件運きに失したる感あり、当然の事として凡てを本部に一任します。

○殉国の英霊に捧ぐ、改版発行に就て、価格の如何に不拘一部申込みます。

新 潟 高 林 セキ

かねてお聞きしておりました、環礁で「中部太平洋へ出発に当って」を拝見いたし、又々本場に御苦勞様でございます。

再度の遺骨収集に、政府派遣団に本会代表としての御参加、お命令にも拘りませずご出発の由、ただただ頭が下るのみでございます。

まだ外地に眠る英霊の遺骨を、南冥の涯より、故国にお迎えしてきて下さい。英霊はキッと待つております。

刻々とご出発の日も迫り、何かと準備にお多忙の事と存じ上げております。

長い船旅、何よりもお体にお気を付け下さいまして、南方の島々を廻つてきて下さいませ。

最後にご健康をお祈り申し上げると共にご無事のお帰還をお待ち申しております。

か し こ  
佐 世 保 井 上 義 夫

拝啓 特別暑かった今年の夏もようやく終り、朝夕はめっきり涼しくなつてまいりました。九州地方も先日久しぶりに恵みの大雨を自然も存分にうらうらお人も動物もしもうとこれしております。

会長様初め役員事務局の方々この夏をお元気で切り抜けになられましたか。会の運営作業御苦勞様で大変でございます。

先日は「環礁十九号」をお送り頂きまして有難うございました。読ましてもらいますと多彩に亘つて会のお仕事をなさつていられたことを知り、唯々お世話様でございますと感謝の外はありません。

おっしゃるとおり来年はクエゼリン玉碎して三十年目になります。うかがいますと靖国神社に慰霊碑の副碑を建てられるとかさぞかし霊も安んじ、遺族もお喜びのことでしょう。そして三十年祭をなさるとのこと、結構なことでございます。

それだけに又いろいろ大変でございます。何をやるにも経費高の昨今ではありますし、些少ですが、同封小為替は費用の一部に充てて下さい。

それから環礁に「クエゼリンの今昔」のことがありますが、発行部数に達しますれば、私にも一部注文させていただきます。

今年のお盆には佐世保市内の遺族を訪ねてお詣りをしました。年老いたお母さんが眼をうるませて喜んで下さると私もこみ上げて来て又心が新らたになります。浮田様が秋にマールシャル群島方面に遺骨収集団としてお出になるとか、どうかお氣をつけられ行つていらつしやいませ、ではお礼お願まで申し上げます。

敬 具

新 潟 波 谷 セキノ

前略 今回は環礁十九号お送付頂き有難うございました。

何時も事務局の皆様御苦勞に感謝致してよこんで読ませて頂いております。

私の主人も只南方で戦死と云うだけで何もわかつて居りませんでしたので、実は此の環礁初めて頂いた時只なんの気なしに読ませて頂いていました。でもなんとかして主人の最後の場所が知りたくて、事務局にお尋ね致した所、御親切に戦死場所、部隊名までお知らせ下さいまして有難うございました。

この時はじめて真実に戦死なんだなあ……。やっぱり、もう帰って来ないんだと云う気が致しました。

環礁によれば今回又浮田様、遺骨収集派遣団に参加され中部太平洋にお出発の由真実に御苦勞様です。前回の島々を挨拶やら収骨やら……。私の主人は「マロエラップ環礁」で戦死とか、又今回もこの島にもお出になる由、何も知らなかった、この島の名前、でも今はこの島の名聞いただけでも懐かしさがこみあげて来ます。

本会の浮田様が又この島にお出になる、私も今すぐにもとんで行きたい様な気が致します。

主人が骨を埋めた土地島民の皆様にも何彼とお世話になったり御迷惑をおかけした事と思ひます。呉れぐれもよろしくお願ひ致します。

別便にてお金少々お送り致しましたから、島の皆様へのお土産のそして収骨の場所に何かに少しでも役立てて頂きたいと思ひます。

### ◆浮田さんからの便り

十月十一日出港して、十六日にサイパンから出したものを二十二

日に、二十二日にトラックからのものを二十六日に、二十六日にポナベから出したものを二十九日受取りました、克明な記録と、沢山の写真がありますがすべてをのせきれないのがほんとうに残念です。

殊に写真はカラーですからこの環礁ではどうにもなりません。出発直前迄危ぶまれていたクエゼリン上陸が実現する様です。ほんとうによかったと思います。次のお手紙は浮田さんからお留守宅にきたものですが、お許しを願って敢えてその一部を掲載します。



トラック島の次に予定したモートロックの遺骨収集は終った。モートロックで従軍した陸軍の南洋第四支隊の帰還者三人がこの収集団に参加していた。その内の一人が当初からの予定で今日ポナベで下船し飛行機で立って、今日はガム泊り、明二十七日ガムをたつて夕方東京につく秦野という人に頼んで、この手紙を送ることにしました。

ポナベには昨夕(25日)着いた。税関だの検疫だのと用があった夕方七時から上陸ができた、芦名さん達厚生省の若手三人と一しょに上陸した。六年前立寄ったときの埠頭は改築されて立派になった。その埠頭から町までは六年前は水上タクシーを利用したが、今日は道路もできたので陸上をその

ままタクシーでゆけるようになった。

特にバスというのはないが、ダットサンとかトヨタの小型トラックが結構ウロチョロしている。それによると船から町まで25セント(70円)ほどでのせてくれる。

八時頃から上陸した。丁度米人のトラックがいたのでのせてもらった料金はいらぬと好意を見せた、店はあるが、ポツリポツリとある店が多くは雑貨が割は日本の商品である、酒類をのむためには予め警察から許可をとる。

許可証をとるためには予め一ドルを出して年令、姓名は勿論身長、体重まで記入して警察官の立合いで承認を得る。

小林さんと竹下さんは一ドルふんばつてそのバスをとった。芦名さんと僕は面倒でもあり受けなかつたが、町に出てバスを持った二人はおそく帰って来た。芦名さんと二人は雑貨屋に入ってミツヤサイダーを一本ずつ仕入れて暗い町を立ちのみし乍ら歩いた。町自身家も少しづつきれいになり郵便局は新しくなっていた。ブラブラ二十分ほど歩いていて、そのままだった、日本時代ポナベ支庁のあった跡附近で乗合タクシーをひろって九時すぎ帰船した。

ここでは真水を搭載するとあつて入浴、洗濯の許しが出た。ホンコンシャツやシャツ、ズボン下等もつて浴室にいった。ナショナルの洗濯器まで三台並んでいる、上陸人が帰らないのです、上陸した四、五枚で勿体なくはある

が粉石鹸を充分入れて(学生の方が浮田さん沢山入れますから使つて下さい)15分もかまわれるのでありススイで乾燥機でまわした。心地よくなつた。その上でゆつくり入浴、頭も洗った。スガスガしい。夕食は魚の照焼とキンピラだった。ポナベ入港前に団員全員にマシーシャルの歴史や住民性について一時間講義をした。阿部団長から大いに感謝された。

船は相当のローリング中なので三、四人の学生はまっさおな顔色だった、はじめからノートをもちつて出席していた佐藤孫七船長は解散とともに、お茶でものみまじょう室に来て下さい、と誘つて下さつた。

芦名さんと二人部屋に入るなり船長は「私のいいいと思つていたことをすっかりいって下さいました。いいお話ありがとうございます」と前置きしてお茶のみながら話した。

不愛想な南洋の島民に戦争によって日本が迷惑をかけたことを謙虚に詫びて今後の交友を通じて幸せを分かちましようという気持ちで徹底して話したことがどううれしかったら話した。四十四年ギルバートにいった学生の失敗もよくはなしてきかせた。12月26日に12チャンネルで放送予定の佐藤静夫ディレクターもかなり感激したらしく、この放送の筋は右の考え方を一貫する無名の墓といったタイトルにするとか話して。そうすればかねてマシーシャルの人は大切にしてあげべきだと思つたことが、小さな形ではあつても

人にしられてよかつたナと思つた。

今日(26日)は午後二時船を出てポナベを観光する。先年いって植物園にも水田(稲)にもゆつたあろうし、又先年見なかつた滝も見れると思う、そして特に用意した島民の踊りも見せてくれるらしい。遺骨収集団というより東海大学の練習船(練習艦隊と同じ意味合いで)という意味で格別のショーを用意したらしい。

その建造の年月の不明な古城がポナベ島の一部のナンマル島にある。歴史上の遺蹟で島民は靈城として尊敬している、大阪城に使つてある程の石を使つてあるという。そこまではどうしても船でゆかなければならない、それを明日見にゆく。

船長はトラック島にいる頃からその話をしていた。自分も見たいが皆にも見せたいといつていた。船便その他制限され、船長と実習生五人と僕とあと一人計八人三隻の高速モーターボートで3名、3名、2名にわかれてとばす、料金は一人15\$(四、〇〇〇円)風と波或はスコールによつては頭からズブ濡れの用意をしてゆく。この前のときも佐竹さんとゆきたい話があつたが時間の都合でゆけなかつた所。今朝は納豆と味噌汁(みはなっぱと豆腐)白菜の漬物。中々ご馳走があり洋食ばかりのパンフィックより有難い。そろそろ四支隊の秦野さんの船が出る。

29日(月)頃つくだではないだろうか。

元安でやっていること佐藤、佐竹、安藤諸氏に伝言たのむ。

30日にクサイをでると二日はいよいよマジユロ、マジユロの打合せにより予定をかえて、マジユロからアイリングラブラブによって次にクエゼリンに入るかもしれない。

そうなると十一月の六日(クエゼリン)では五日、月曜)はクエゼリンの墓参ができる。その日が待たれる。大部寒くなつたことと思う、一層の自愛、健康をいひの。ラン、ゴム、その他の水やりたのむ。武家、美代子、尚家のところにも伝言しかるべく。

二十日ポナベにて。櫻代様 信家

環礁ミレー抄(11)

成宮芳三郎

傷つける

海兵三人

手を握り

正しく歩めり

我に続き

太平洋の

白波たぎつ

さんご礁

朝日ひっそりと

静まり照らふ

(元66警ミレー軍医長)

# 昭和四十九年二月六日 (水)

## 三十年祭・副碑献納式 定期総会・現地報告会 直会 旅行会 の御案内

### 一、三十年祭

午前九時受付を始めます。いつもの通り靖国神社参集所にお集りください。

### 二、副碑献納式

靖国神社宝物遺品館で、三十年祭に引つづき行います。終つて九段会館地階食堂にお移り頂き、中食をいたします。

### 三、定期総会

午後〇時四十分、九段会館三階芙蓉の間で行います。

### 四、奉納歌謡

歌手として益々円熟されこの程紫綬褒章を受けられた渡辺はま子さんが、戦地慰問に、又戦後幾多の困難の中で外地の戦犯慰問をされた時見聞されたお話や、その頃歌って下さった想い出の名曲を英霊へ奉納、私達も御相伴の予定です。  
(渡辺はま子さんは特別の事情が起らない限りおいで下さることになっております。)

### 五、現地報告会

浮田副会長が今回再び現地で見たこと聞いたことなどをくわしく報告いたします。又、質問その他お話し合いの時間を多くとりたいと考えています。  
今回現地で撮った写真も沢山展示して御覧頂きます。

○中食は出席者全員の分を用意しておきます(一人三〇〇円)。不要の方は出席通知のほがきにご旨御書き入れ下さい。

○九段会館に宿泊希望の方は、宿泊日、男女別、氏名を書いて一月十日迄に料金添えお申込ください。

○九段会館に宿泊希望の方は、宿泊料金は一泊二食付一人に付二二〇〇円です。

○直会(なほらい)旅行会

時 二月六日(水)、七日(木)

所 箱根 湯本 嶺水苑

電話 〇四六〇一五五三三八

参加費 一人 六五〇〇円

宿泊料、往復バス代、拝観料、七日の中食代とも。

申込 一月十日迄に料金添え、氏名、男女別、年令をはっきり

申込

電話 〇四六〇一五五三三八

参加費 一人 六五〇〇円

宿泊料、往復バス代、拝観料、七日の中食代とも。

申込 一月十日迄に料金添え、氏名、男女別、年令をはっきり

申込

電話 〇四六〇一五五三三八

参加費 一人 六五〇〇円

宿泊料、往復バス代、拝観料、七日の中食代とも。

申込 一月十日迄に料金添え、氏名、男女別、年令をはっきり

申込

電話 〇四六〇一五五三三八

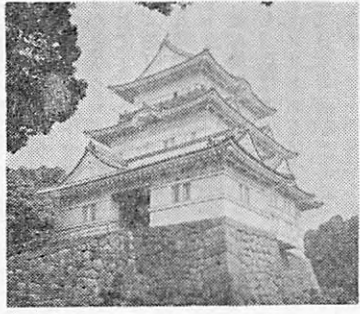
参加費 一人 六五〇〇円

宿泊料、往復バス代、拝観料、七日の中食代とも。

申込 一月十日迄に料金添え、氏名、男女別、年令をはっきり

申込

電話 〇四六〇一五五三三八



小田原城天守閣

書いて下さい。一座席を使うお子様は人数に入れて下さい。一月十日又はそれ以前でも定員(六十名)になった時締切りますのでなるべく早目にお申込下さい。

日程 二月六日(水)午後四時九段会館中庭からバスで一路箱根湯本に向います。入浴の後例年の通り楽しいひと時をすごしましょう。

二月七日(木)バスは小田原城に向い、天下の名城を見学し、更に足柄市の大雄山最乗寺(道了尊)に参拝の後小田原に戻りドライブインで中食の後、大船、横浜、東京駅を経て九段会館に帰ります。交通事情によっては他に一、二箇所廻りたいと考えておりますが、発表は当日に致します。

○御案内 旅館は岡野幹事夫妻のお骨折りで純日本式な素晴らしいところ。御期待下さい。

小田原城は、古く小早川氏、大森氏の居城であったが明応四年北条早雲が占拠し以後五代九十六年小田原は大城下町として栄えた。

天正十八年四月、豊臣秀吉の大軍を迎え戦い、ついに七月九日落城した。その後徳川家の所管となり、城主は大久保氏、阿部氏、稲葉氏、大久保氏と代り、明治三年廃城取こわしの運命となった。

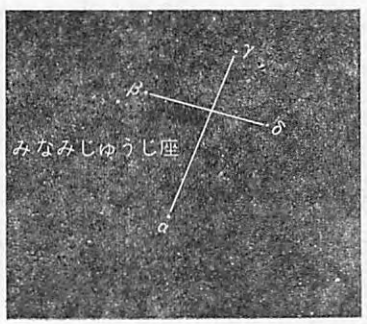
現在の天主閣は昭和三十五年五月に復興完成した。

大雄山最乗寺(道了尊)は曹洞宗に属し、永平寺、総持寺に次ぐ古刹。境内山林合せ二二〇町

歩には老杉古松うっ蒼として靈氣満山に漲る感がある。応永元年了庵慧明禪師の開創。禪師の法弟子妙覚道了は修験の長老であったが開創事業にあたっては溪を埋め嶺を開き大石巨木を運搬するなど超人的な働きをした。応永十八年禪師遷化の時「今より当山の守護神となり諸人に利益を与えん」と五つの御誓願を唱えられ山中深く身をかくされた。

## ☆南十字星

- α星は〇・八等星
- γ星は一・六等星
- β星は一・二等星
- δ星は二・八等星



南十字座という正しい呼び名では感じがないが、南十字星と云うと、胸にじんとくる。

でも四つの星のうち一番上のγ星がやっと見えるだけ。グワム島迄行けば丁度見頃の高さになる。八十八の星座のうち一番小さい星座でいながらこれ程魅力ある豪華な星座は他にない。

これは私がクェゼリンで兄を失ったからではなく、昭和十二年に軍艦沖島で南洋に行くことになった時友人達から、南十字星を見られるのが羨しいと云われ、私共乗員は想像して胸をわくわくさせた想い出がある。

暗い甲板で、艦の行手の南の空に斜に傾きながら天空さして昇ってゆくような四つの星を初めて見た時、神秘的、宗教的な感に打たれ、仏教徒でありながら十字をきりた、仏教徒にかられたのだった。

写真ではわかりにくいのが十字の交叉する右下の小さい星は古来視力の検定に使われた由で、当時視力一・二の私には何時でもはっきり見えた。

本会旗のデザインには、亡き英霊たちが同じ思いで毎夜見つめていた管のこの星をと思い、役員会のとき即席で画いたのが全員一致の賛成を得られ、心ひそかに満足した。バッジのデザインにも同じ南十字星を使うことになったが、その周囲に砂浜の白と椰子の緑を入れることになったのは、浮田さんの意見であった。

何れの日か、又自分の目で南十字星を思うのは私一人だけだろうか。

☆ ☆ ☆  
(佐藤)

# 寄付者芳名

(七〇名)

今期もまた左に掲げますとおり、多数の有志の方からの御寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。

ここに載せました会員の方からは、寄付の外に四十八年までの会費は全部いただいております。中には四十九、五十年と先々までの分を前納下さっている方も多数ありますことを申添えます。

環礁を御覧下さってお喜びのお便りをいただいたり、寄付の御送付によって経済的の御協力をお考え下さる実情に接し、会長はじめ役員一同張り合いを感じ努力をつづけしております。

(昭和48年6月1日から昭和48年10月31日までに入金の分)

篤志会員その他

五〇〇〇 矢崎 寧之 殿

三〇〇〇 井上 義夫 殿

一〇〇〇 竹浜 健蔵 殿

一〇〇〇 細川 きく

一〇〇〇 池田 精治

一〇〇〇 杉渕 オイネ

一〇〇〇 橋本 ミヨ

一〇〇〇 鈴木 五一

一〇〇〇 佐藤 角治

一〇〇〇 山田 信子

一〇〇〇 長男 高林 芳夫

一〇〇〇 妻 渋谷セキノ

一〇〇〇 姉 鮫島みさを

一〇〇〇 兄 安中 久雄

一〇〇〇 妻 高林 セキ

一〇〇〇 父 高野 仙吉

一〇〇〇 母 山田 信子

一〇〇〇 妻 高林 芳夫

一〇〇〇 妻 渋谷セキノ

一〇〇〇 姉 鮫島みさを

一〇〇〇 兄 安中 久雄

一〇〇〇 妻 高林 セキ

一〇〇〇 父 高野 仙吉

一〇〇〇 母 山田 信子

一〇〇〇 妻 高林 芳夫

一〇〇〇 妻 渋谷セキノ

一〇〇〇 姉 鮫島みさを

一〇〇〇 兄 安中 久雄

一〇〇〇 妻 高林 セキ

一〇〇〇 父 高野 仙吉

石川県 一五〇〇 妻 前田 ナカ

長野県 一〇〇〇 母 伊藤ひさゑ

〃 五〇〇 妹 牛山 光子

〃 〃 妻 木下 志満

〃 〃 妻 吉田 喜一

岐阜県 五〇〇〇 兄 戸田 数雄

京都府 一五〇〇 妻 八木 きよ

兵庫県 三〇〇〇 母 有馬 あや

〃 一〇〇〇 母 岡本 くま

〃 一〇〇〇 母 植田 操

〃 一〇〇〇 父 中山 道源

〃 五〇〇 妻 田口マサヨ

山口県 五〇〇 父 長川 恵

愛媛県 一五〇〇 父 新谷 房男

高知県 一〇〇〇 妻 原 紀代美

福岡県 一〇〇〇 父 鐘ヶ江 弘

〃 一五〇〇 父 杉山 柳平

〃 五〇〇 兄 一木 貞利

〃 〃 妻 池末 ツマ

〃 〃 妻 森 キヨ子

佐賀県 一五〇〇 弟 岡 茂平

長崎県 一五〇〇 妻 松尾 フサ

〃 一〇〇〇 妻 森川 チノ

〃 一〇〇〇 妻 福井ヨシ子

〃 五〇〇 母 山下 キエ

熊本県 五〇〇 母 田上 スマ

〃 〃 母 荒木ジュカ

宮崎県 〃 〃

一〇〇〇 長女 宮田 東子

五〇〇 母 土工あぐり

鹿児島県 一五〇〇 父 塗木覚兵衛

一〇〇〇 妻 今村市太郎

〃 〃 妻 中堂園シヅ

〃 〃 妻 浦崎 ナエ

〃 五〇〇 妻 金城 カミ

〃 〃 妻 野原カマド

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

〃 〃

交々であった。

父の戦死の通知はその後ずつと

遅れて五月二十九日付であったが

水漬く屍と化した父が寂しさの余

り可愛い娘をそして翌年、最愛の

妻を呼び寄せたものであろうか。

その父からの最後の手紙が有難

くも保存されていたので、お許し

を得て、ここに原文の儘ご紹介さ

せて頂きます。

(注) 便箋三枚に毛筆、宛名茶谷東

海嶽は元海軍主計大佐、現記念艦三

笠保存会常務理事、房子は私の母、

節子は私の姉。

〇

一月二十六日

何日も御世話様にのみなつて済

みません。益々御清勝の事と拝

察致します。又皆々様もお健か

の事とお喜び申上ます。

明日急に二五二空主計長が經理

局へ行くとの事にて之を托す事

となり唯用件のみお頼みしま

す。即ち右主計長へ房子よりの

手紙を托し得る場合は依頼方お

願致し度く、若し海軍省へ出る

のが一回切りにて房子の手紙届

ける暇なき場合は節子の容体丈

け一筆御言附願ひ致し度く。

仲々手紙が届かないので節子の

容体一更判らず、恰度良い便を

利用し御面倒をも憚らず御願ひ

申上ます。何れ二月二十二、三

日頃は一寸帰宅致すつもりには

思つて居ります。

取急ぐ儘用件のみにて失礼しま

す。

皆様へよろしく。益々御清武を

祈上ます。

井上梅一郎

茶谷東海大兄

不

訂正 前号寄付者芳名中一〇〇〇

〃 〃

〃 〃

# 事務局だより

## ○本会の会旗完成

会旗作製の要望にこたえて、デザイン依頼をしましたが格別の意見がまいりませんでしたので、本部署で相談の結果「南十字星」を基本にしたデザインを決定し、作製しました。

タテ九〇センチ、ヨコ一三五センチ。南十字星が天空に昇ってゆく姿を表しました。

別に、案内旗として三五センチ×五〇センチの小旗五本を作りました。折よく遺骨収集団の出発に間に合いましたので初使いとなり、小旗一本を浮田さんにお渡ししました。今頃は南方はるか洋上にはためいていることでしょう。

## ○会員章(バッジ)作製

椰子の緑、砂浜の白、海の青と南十字星でデザインしたバッジを作製中です。タイタック仕立としましたので上衣の襟、ネクタイ、着物の襟、帯にもつけられます。

四十九年度分会費(一〇〇〇円)を納入した会員には一人に一個を贈呈し、希望者には別に一個三〇〇円で頒布することにいたしましたのでお申込下さい。

## ○戦史刊行

旧刊「クエゼリン島の今昔」改訂版を作り、希望者に一冊一〇〇〇円で頒布することになりました。マーンシャル諸島、ギルバート諸島の戦況や現況をのせ、本会の戦史の決定版となります。

本会は創立以来民間遺族団体としては他に例を見ない意義ある仕事を沢山してきました。会独自の力での現地慰霊、遺骨収集、現地慰霊碑建立、副碑献納等々でありますが、今回の戦史刊行はこれらの仕事の総仕上げとも云えるものです。一冊でも多くの御申込みを頂きたいと思っておりますので御協力の程をお願いいたします。

## ○政府派遣遺骨収集団出発

本文記載のように遺骨収集団は会員大ぜいの見送る中を十月十一日芝浦を出港し、十二月十四日に帰ってくる予定です。次に出港時の予定表を記します。

- 一〇月
- 一日芝浦発、一七日サイパン、二二日トラック、二三日モータロック、二六日ボナペ、二九日クサイ、
- 十一月
- 二日マジュロ、四日マロエラック、八日ウォッゼ、一〇日ウートロック、一二日ロングラップ、一四日ウジャネ、一五日クエゼリン、一七日アイリングラブラブ、一八日ヤルト、二〇日エボン、二二日ミレ、二八日マジュロ、十二月
- 七日サイパン、一四日芝浦帰着

本文中の浮田さんの便りでおわかりのように右の予定は大幅変更されております。クエゼリンには十一月六日(日本時間)に着くことになるようです。

帰国の時お出迎えをされる方には、入港の月日、時間、場所をお知らせしますので、十二月七日から十日までの間に左記に電話下さい。

四二一―三六一四 本部  
六六一―六五一― 佐藤

## ○郵便振替で送金するときのお願

振替用紙の裏面通信欄に、「払込金の内訳その他」と印刷して、その下に昭和 年度会費と寄付金と書いてあります。この内訳をお忘れなく御記入下さいませようお願いいたします。

この内訳が書いてないと、どのようなおつもりで送ったのか、取扱いに困りますので、是非お願い致します。会費・寄付金以外は、余白にはっきり何のためのご送金かお示し下さいませようお願いいたします。

## ○京都高津三代治様からの御伝言

京都の会員高津三代治様は昭和三十九年の二十年祭以来、二月六日には欠かさず御参列又直会旅行が行われるようになってからは、毎年御参加、あらゆるご協力を下さって、大多数の会員からおなじみ深い人であります。そしてその都度写真をお取り下さって下さり、顔の見える方々には、全部その引伸しを、お送り下さっています。今年の伊東・箱根の直会旅行のときも、例年どおり、あちこちで沢山とって下さったのですが、現像の段階で、手違いがあったらしく全部が駄目になった由です。

高津様がお詫びをなさる筋合の事ではありませぬのに、お待ちになつている方に申し訳ないという環境紙上のご披露願いたいという

# 謹賀新年

昭和四十九年元旦

## ◎本会役員及び篤志会員

名誉会長	朝香 鳩彦	篤志会員	大野 克一
顧問	古賀織之助	篤志会員	嘉村 栄
相談役	朝香 孚彦	篤志会員	木ノ下 甫
会長	村上 義一	篤志会員	ウイス・エムス
副会長	浮田 信家	篤志会員	ケイス・エムス
常任幹事	佐藤 宗丞	篤志会員	瀬沼 光久
常任幹事	井上 賀雄	篤志会員	土屋 太郎
常任幹事	佐竹 エス	篤志会員	徳原 勇
幹事	秋山 正清	篤志会員	同 徳子
幹事	宇田川ヒサ	篤志会員	中島 昌彦
幹事	岡野 正文	篤志会員	中田 虎一
幹事	木村 久子	篤志会員	成田喜代治
幹事	国松ふみ江	篤志会員	西村 祐造
幹事	小泉 文江	篤志会員	長谷川 栄次
幹事	高橋 鎮夫	篤志会員	長谷川 敏
幹事	萩原金次郎	篤志会員	林 幸市
幹事	橋口 昭利	篤志会員	藤平 直忠
幹事	昼間 栄平	篤志会員	松平 永芳
幹事	山浦 信子	篤志会員	村岡 達志
監事	末広 正男	篤志会員	横溝幸四郎
監事	大高 吉郎	篤志会員	安藤 サヨ
篤志会員	有馬 成甫	篤志会員	白鳥 悦子
篤志会員	板垣 徹	篤志会員	本木 光江

ご依頼がありましたので右の経緯記載いたしました。

## ○訂正のお願い

環礎19号8頁第4欄中行誤

3 扶助法 扶助料  
17 扶助科 扶助料  
17 扶助科 この四字抹消  
17 扶助科 この四字抹消  
24 遺族年金 この四字抹消 (佐)

## 本 部

郵便番号一五四  
東京都世田谷区野沢  
三丁目十一番三号  
マーンシャル方面遺族会  
電話(東京)三二六四番